備陽史探訪
記念100号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

『備陽史探訪』創刊から九九号まで

名誉会長　神谷　和孝

『備陽史探訪』が次号で一〇〇号になるので記念に一文をと事務局より依頼があり、喜んで引き受けました。『備陽史探訪』が創刊されたのは昭和五六年（一九八一）十一月二三日、備陽史探訪の会が発足したのが昭和五五年（一九八〇）九月ですから、会の発足とほぼ同時期と考えていいでしょう。つまり『備陽史探訪』は会の発展を見つめ、その発展を記録していく大きな役割を果たしてきたといえるでしょう。

『備陽史探訪』の創刊から九九号までの経過を述べるためには、どうしても備陽史探訪の会の発足のことから述べなければならないと思います。現在の会員の多くの方は会の創立当時のことについては御存じないと思いますので、ぜひ御一読願いたいと思います。

会の発足の原点は、私と現会長の田口義之氏の出逢いだと確信しています。私と田口氏の最初の出逢いは、田口氏が高校生の時でした。ですから、その時から二十七、八年が経過していることになりますね。当時、私も田口氏も何とかして歴史研究の会を結成したいという共通の夢をもっていました。

田口氏が大学に進学したため四年間の空白がありましたが、田口氏が大学を卒業して帰福してから、四年前に抱いていた夢の実現に努力し、昭和五五年九月に備陽史探訪の会が発足した次第です。発会時の会員は五人程度で、その方たちはすべて田口氏が高校時代に結成していたサイクリングクラブのメンバーでした。発会当時の会員の夢は大きかったのですが、現在の備陽史探訪の会の規模にまで発展するとは誰しもが考えていなかったでしょうね。

会則や会の名称等を決めるにあたっては、時間をかけ、激論をかわしたことも今は懐かしく想い出します。その熱い思いのやりとりの中で、誰が言い出したわけでもなく、会の新聞を発行しようということになり、新聞の名も激論のすえ会の名をとって『備陽史探訪』と名づけました。

経費がないので手書きの新聞という時代が長く続きました。印刷は日曜日に私の勤務先でやりました。新聞を発行するということが先行して内容がともなわず、第二号は紙面のすべてがスキーの滑り方で占められていたのも、今となっては懐かしい想い出の一ページです。

会も十年目になると、会員を百余名かかえるにまで発展し、十周年の記念行事を盛大に行い、記念として『備陽史探訪』一号から四五号までの復刻版を発行しました。

発会十年で会長が田口氏にかわり、部会の活動も活発になり、さらに平田恵彦氏を事務局に迎えてからは『備陽史探訪』もだんだん内容が充実し、『備陽史探訪』を手にするのが楽しみでしたね。ただ、次第に高度化してくると、全体的に堅苦しくなるので編集の段階でもう少し、ホッとする内容があってもと思っています。

そういえば、昭和五八年（一九八三）ころから紙面に出現した桑田氏の「突撃・覆面レポート」。これは面白かったですね。会の主だったメンバーを桑田氏が酒脱というか、ユーモアたっぷりに彼一流の文才で紹介したもので、しばらく連載されてましたね。当時『備陽史探訪』を手にした会員ほとんどは、まず最初に覆面ルポの欄を見ていたんじゃないでしょうか。願わくば、もう一度桑田氏に「突撃・覆面ルポ」の筆をとってもらいたいですね。

さて、『備陽史探訪』が一〇〇号まで続けてこられた陰には、編集に携わった方々の大変な努力と情熱があったからこそと、衷心より感謝しております。原稿の募集・紙面の組み立てという作業は大変な努力を要することなのですが、充分そのことに対して表だって感謝の意を表したり、労をねぎらったりしていないんじゃないかと思い、改めてこの紙面を借りて編集に関わって下さった方々に感謝の意を表しておきます。

私はかねがね『山城志』『備陽史探訪』は会の顔だと言い続けてきました。これらの会の発刊物を見て、会を高く評価して下さったり、会員になって下さった方も多数いるから、そう思っているんです。

備陽史探訪の会も二十周年を迎え、『備陽史探訪』がますます充実していくことを祈っています。

思い出すこと

会長　田口　義之

本会の会報『備陽史探訪』がこのたび、目出度く一〇〇号を迎えた。まことに喜ばしいことである。

『備陽史探訪』がはじめて発刊されたのは、今を去ること二十年前、昭和五六年（一九八一）の十一月二十三日のことである。B4版の一枚の紙で見開き二ページの粗末なものである。

内容は、「この一年の歩み」と私の駄文「史跡散歩―赤坂町―」の二つのみで、最後に「編集後記」として「本会ではより良い活動を目指しております。どうかどしどしご意見をお寄せ下さい…」と記してある。

この会報は、現在は退会されているが、私の友人猪原進君がタイプライターで打ったものである。当時彼は卸町（おろしまち）の福山産業会館に勤務していて、タイプライターがあったから頼んだものだ。それから会報は手書きから印刷へと進んで、現在のような二十頁も珍しくない豪華版になった。

◇

この会報一号「この一年の歩み」を見ると創立して間も無い頃の会の活動の様子がわかる。それによると、昭和五五年（一九八〇）の九月七日に会を結成し、翌月の十月二六日に第一回の例会を催している。目的地は鞆で今は定番となった鞆の史跡を徒歩で回っている。アルバムを開くと当時のメンバーは神谷先生を除いて皆二十代半ばで頭の毛がふさふさしているのが印象的だ。

この日の記憶はもう定かでないが、二十年間、おそらく二百回を超えた本会の例会の中で特に印象に残っているのは、やはり第一回目のバス例会「神石町の史跡めぐり」であろう。

この例会は今は亡き武島種一さんが講師で、バスの手配も武島さんがされた。確かバスは中型で上下町のタクシー会社からチャーターしたもの。最初は一台の予定だったが、人数が増えもう一台追加した。また、この例会では後に会の主要なメンバーとして活躍されたS氏やM氏、G氏がはじめて参加された例会としても意義深い。

◇

会の年表を紐解（ひもと）くと、この例会は昭和五八年（一九八三）四月三日、晴天の日曜日に行われた。この年は他にも意義深い出来事があった。「親と子の古墳めぐり」の実施がそれだ。今ではこの行事は会の恒例行事となり、準備その他も毎年型どおりに行われ、役員には緊張感もさほど無くなったが、この年のそれは会にとってはじめての「挑戦」として、神谷会長以下意気込みは大変なものだった。三月ごろから何度も会合や下見を行い、その日を待った。

そして、当日が来た。心配した天気はまあまあだ。朝八時、世話方全員はりきって集合、参加者も一二〇名を越えた。それからはもう夢中でそれぞれが決められた役割を果たすのみ。午後四時三十分、事故も無く福山駅に到着。役員には安堵（あんど）の表情が見られ、その後、会の恒例となった「養老の滝」に乗りこんだ。この時の養老の滝は今の場所ではなく、ピカデリーの東隣にあった。慰労会は盛りあがった。それにも増して興奮したのは、店内にあったテレビのニュースで「古墳めぐり」が報道されたことだ。テレビの画面に我々の姿が映し出される。丘の上の道を長蛇の行列がうねるように続く、全員思わず「万歳」の歓声を挙げた。

◇

私にとって一番強烈な思い出は、平成二年（一九九〇）の「第八回親と子の古墳めぐり」である。この年のコースは服部大池周辺で、参加は約百名。ドラマは早朝五時から始まった。朝目覚めると外は、滝を流すような「豪雨」、さて、どうするか…。テレビを付けると、天気予報では午後晴れのマークが出ている。

この時は、さすがの私も迷った。会長就任直後のことで、全責任は私にある。私は、天気予報を信じた。結果は「吉」と出た。雨は現地に着く頃にはウソのように上がり、十時頃には真っ青な空が広がった。

◇

会は皆さんのものである。皆さんに良い思い出を残していただけるよう、これからも頑張っていきたいと思っている。

第一回親と子の古墳めぐり　二塚古墳のある藤井さん宅にて。（マイクを持つのがまだ二十代の私）

高度一〇〇〇フィートから

山口　哲晶

春のある日空を飛んだ。まだあまり強くない陽は山影をぼんやりと平野に映すだけで、春霞のせいかそれは余計にうつろなものに見えた…。

てなわけで飛んで参りましたよ、飛んで。網本氏のはからいで笠岡の農道空港からの遊覧飛行。飛行機は四人乗りのセスナ。当日のメンバーは網本氏に田口会長、そして私の三人、もちろんパイロットもね。

空は快晴、風はそよ風、視界は春霞、そしていつもより重装備の私、といっても酔い止め薬を持っていっただけだけど。何せ城郭部会の小林浩二さんが脅かすのなんのって、

「飛行機がこうグーンと傾いて、そう四十五度くらいにね。酔わない人はいないよ。経験のない人は絶対に酔うね」

その目は明らかにある期待を込めた眼差しのように思えた。十一時に空港で待ち合わせた私達、空港はいたって静か。時間の都合で吉備路から駅家町へとルートを変更、約二十分のフライトである。空を見上げていた私達の前に音もなくセスナが舞い降りてきた。

『ほう～あれか、以外と小さいもんだな、音も静かだし』

初めて見るセスナに興味は尽きない。会長の談によると零戦よりも小さいとか。座席の用意がすむと、

『私が一番偉い』

というように会長がパイロットの横に、しずしずと後部の席に網本氏、とりあえず乗っとけと私、いざテイクオフ。

エンジン全開で滑るように離陸していく。しだいに笠岡の干拓地が碁盤の目のように見えてくる。進路を北西に取り飛んでゆく。下界の景色が手に取るように間近に見える。

何万フィートも高く飛ぶ旅客機では絶対に味わえぬ臨場感、私は今空を飛んでいるということが実感できる景色にしばし皆息をのんでいた。やがて坪生上空を過ぎ、春日池が眼下に見える。写真に撮らねば、と夢中でシャッターを押す。春日上空を過ぎるとセスナは神辺町に入る。

見える見える。迫山古墳群、亀山遺跡、亀山第一号古墳、こんなに間近で手に取れるくらいの上空から見たのは初めて。興奮の中セスナは加茂町へと入っていく。突然

「すばらしい」

と叫び声をあげたのは網本氏、それもそのはず目の前には石鎚山古墳群がくっきりと平野に突き出した丘陵の上に見えたのである。

平野はあくまで平坦で淡い緑に色づいていた。それに両側からひときわ深い緑の丘陵が稜線を描きながら突き出している。その丘陵の中に明らかな人工物として浮かび上がっているのだから。

セスナはパイロットの好意で旋回しながら高度を下げてくれる。まさに手が届かんばかりである。すばらしい光景を目に焼き付ける間もなく写真を撮り終えるとまたエンジンを吹かして上昇する。この繰り返しである。

掛迫第六号古墳では

「よく見えましたね、あれは、まさに前方後円墳ですよ」

と網本氏。掛迫城跡では

「よくわかるね、あれが掛迫城跡」

と会長。そして濃い緑の中に二子塚古墳を見た。会長は遺跡が近づくたびにパイロットに

「あそこが〇〇」

と説明し、場所を指示していた。その顔は無邪気な子供のように無垢で純粋な笑顔をしていた。服部大池をターニングポイントとして帰りに神辺城上空を旋回後農道空港に。

帰路、我が家の近くも通り過ぎた。この日笑顔で送り出してくれた妻の顔が浮かんだのは言うまでもない。フライト中、私はフィルムを二本も使ってしまった。もう一本持っていけば良かったと悔やんでも仕方がない。飛行中の会長の顔、しずしず顔の網本氏の顔を是非とも撮りたかったのだが、なにせ私自身が興奮の坩堝なのだから致し方ない。

小林さんの忠告もなんのその、セスナから降りて開口一番

「よかった！」

と三人とも口をそろえた。多少の揺れはあったものの、まあこんなものでしょう。少なくとも、スペースワールドのタイタンよりは恐怖心はない。ましてフリーフォールなんぞ屁にもならん。快適そのもので揺れはほとんどなく、スピードは適度。むしろ眼下に見える遺跡のすばらしさには感動すら覚えた。

「神辺平野が広いことを改めて実感しました」

と網本氏が目をうるうるさせていたのは私だけが知る秘密である。私にとっても実にすばらしい体験であった。時間がもう少しあれば東は吉備路、西は芦田川辺りまで行けるのではないだろうか。空から遺跡を見てみたい人には絶好の機会であることは疑いない。

鬼ノ城にも行けるぞ、七森君。た

だし、セスナにはトイレはないからね。

空港に別れを告げるとき何となく寂しい気持ちを抱いていたのは私だけであろうか。季節はまさに春。霞の中で淡い夢を見させてもらったような気がするひとときであった。

空港からの帰り道、名も知らぬ草花が風に揺れていた。私達にはわからないが彼らは敏感に季節の変わり目を感じているのだろう。その仕草はまるで

「おかえり」

とでも言いたげであった。

弥生吉日に記す

在郷町横尾にあった女の館「さしや」について

出内　博都

千田町横尾にある浄教寺は、今は無住であるが、明治初年には最初の啓蒙所になった由緒をもつ寺である。在郷町横尾をかかえる寺だけに、素晴らしい墓も多い。その中に一つだけ「法界地蔵塔」がある。総高一八五センチの堂々たる石仏であるが、これだけでは他に多くあるものと変わりはない。しかし、この像に「釈容貞信女」という女性戒名があり、台石にも施主「指屋（さしや）　於鳴遠（おなを）」、さらに石造の花立の側面には「さしや　おまつ」と彫られている。関係者すべてが女性という地蔵塔は、村内でこれ一基のみである。

村内に存在する十基にあまる法界地蔵塔は、まったく戒名のない法界万霊供養塔か、夫婦戒名の地蔵塔である。しかもその場合、女性は単に「妻」とあるだけで、名前は分からない場合が普通である。こうした時代的背景のなかで、女性が独立人格として名前を残すことは異例のことではないだろうか。こうした興味から、この一群の同時代の墓石を調べたら左上表のようになった。

この表から考えられる点として①の女性は「指屋宗吉母」とあり、○○妻になっていないし、夫に当たると思われる人物の墓も見あたらない。②③⑤の夫婦墓はすべて男性の夫婦姓（三谷姓）となっており、④⑥の男性独身墓も三谷姓になっている。⑦の女性墓は「さしや　おその」と女性の単独名になっている。

⑧がこの墓地の中心になる地蔵塔である。⑦と⑧は墓地内の位置は少し離れているが、忌日が「文政五壬午六月十六日」と一致するので、同一人物の墓と供養塔ということがわかる。次に⑨の墓は石造花立を寄進した「さしや　おまつ」という立派な人格名をもつ女性の単独墓である。ここまでみると、女性だけが「指屋」を名乗り、男性および夫婦は「三谷」を名乗る傾向が認められる。

しかし、ただ一つ例外として⑩の夫婦墓がある。夫婦墓でありながら「指屋」を名乗り、しかも妻の名が出ていない。この墓地の地蔵塔にまつわる三人の女性のうち、施主として中心になった「おなを」の墓が見あたらないのはどういうことだろうか…。この⑩の墓は他の墓より一回り大きく、加工も丁寧であり、石塔

浄教寺墓地に残る関連墓石一覧表

No.	年号	西暦	墓石形態	銘文	備考（過去帳による補充）
①	天明四年	一七八四	個人墓（信女）	指屋宗吉母	
②	寛政十年	一七九八	夫婦墓		過去帳に寛政十一年（一七九九）宗兵衛＝惣吉養父とあるものか
③	享和三年	一八〇三	夫婦墓		没年は妻か。惣吉は文政十三年（一八三〇）の過去帳あり
④	文化二年	一八〇五	個人墓（信士）	三谷武助	宗吉四男
⑤	文化九年	一八一二	夫婦墓	三谷惣兵衛夫婦	
⑥	文政三年	一八二〇	個人墓（信士）	三谷久兵衛	宗吉末子、宗吾弟
⑦	文政五年	一八二二	個人墓（信女）	さしや　おその	宗吾娘
⑧	文政五年	一八二二	法界地蔵墓	釈　容貞信女	
⑨	文政六年	一八二三	個人墓（信女）	さしや　おまつ	宗吾娘
⑩	文政九年	一八二六	夫婦墓	指屋惣五郎夫婦	過去帳には「十二年十月四」とある
⑪	天保二年	一八三一	個人墓（童子）	指屋松二郎	

の左側面に御和讃が刻まれている。それは次のように浄土真宗の教義に沿うものである。

どう那里とまかす他力や木の葉舟
　　桂花
かか類小春も不可称不可思議
　　白二庵（原文は草書体）

女性の方が上の句を作り、男性が下の句を和した合作で、二人の雅号も入っている。雅号や歌の形式からみて、妻として、女性としての地位は確立していたと思える。

井原市高屋に現存する「三谷家過去帳」を参考に一部想定系図を示すと左記系図のようになる。

また、系譜は不明だが、その他に記載のある名前とその死亡年月日をあげると次のとおりである。

久兵衛（安永二［一七七三］・九・一〇）。乙女（安永六［一七七七］・十・一九）。久兵衛妻（天明五［一七八五］五・二六、惣兵衛実母）。宗兵衛（寛政二［一七九〇］六・一二、惣吉養父）。宗兵衛妻（文化九［一八一二］一〇・二四）。

墓地がたびたび移動しているのですべての墓があるとはいえないし、過去帳にも錯乱があり、後世に訂正・削除があるので、正確を期すことは難しいが、次の事項はおおよそ正しいと思われる。

①忠六・於ゆ里・宗吉の関係はこのままであるが、忠六についてはここに墓はなく、宗旨も違い、他の寺にあると記している（その寺は記録漏れした）。

②宗吉・武助・久兵衛の関係は記録のままである。したがって武助・久兵衛の長兄に惣五を想定せざるをえない。

③於奈美・お園・おまつ（松）は惣五の娘という記録がある。

④奈をには享年七八の記載があり、惣五郎妻と明記してある。奈をとお園・おまつの関係を示す記録は不明である。

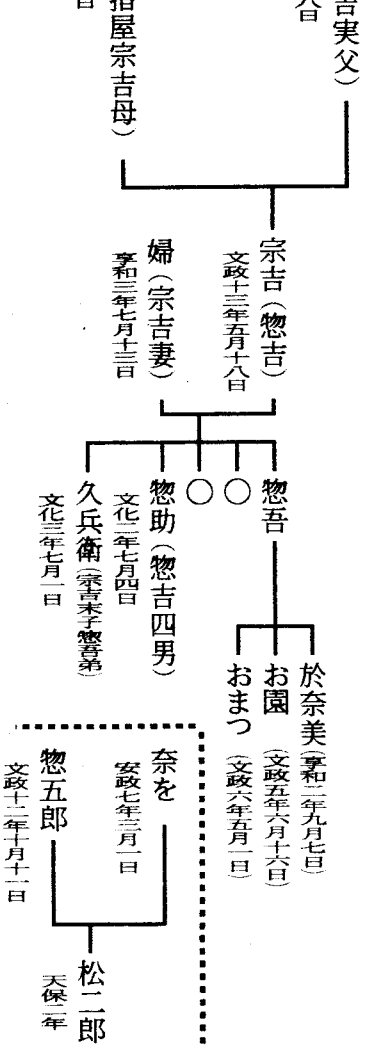
総合的に判断すると、次のようなことがいえるのではなかろうか。

年代順に二番に古い②の夫婦墓が銘文不明であるが、過去帳に寛政十一年宗兵衛があり、その註に惣吉養父がある。また、過去帳によれば、③の惣吉の没年が文政十三年（一八三〇）五月十八日とあり、享和三年（一八〇三）は妻の没年でないか？宗を「そう」と読めば、宗吉の寡夫の暮らしも長いので晩年、「宗」を「惣」に改名したと考えると、①②③の三基の墓には、於ゆ里・宗吉（惣吉）・宗兵衛の三人にまつわる人間模様が窺える。

すなわち①の女性が「さしや」という屋号を名乗るにふさわしい条件をつくり、⑦のおそのにいたって名実ともに「さしや　おその」として独立的地位を確立し、「指屋初代」として地蔵供養塔を建て、より懇ろに供養されるようになったものであろう。

この供養塔建立の中心人物「おなを」は、過去帳では惣五郎妻として、没年安政七年（一八七〇）三月一日、七八歳となっており、天明二年（一七八二）生まれということになる。おその没年には四十歳になっており、後継者として供養塔を建立したのだろう。夫惣五郎が文政九年（過去帳は文政十二年）に死去したとき⑩の墓をつくった経緯は分からないが、その後、三十年間、幕末の混乱のなかで「さしや」を維持していったものと思われる。一子松二郎に先立たれ、せめてもの願いで「さしや」

井原市高屋三谷家過去帳による想定系図



の名を残したのだろう。これより後の大きな墓はすべて三谷姓である。④の通り、おなみ・おその・おまつの姉妹とおなをの続柄は不明である。

こうした女性の独立的地位が確立された要因は何だったのだろうか。その謎を解く鍵が「指屋＝さしや」にあるのではないだろうか。「さし」という語について、『日本民俗大事典』には、

「サシは刺繍することを言う。古くは労働着を丈夫にしたり、作業を妨げる魔力を追い払うための刺繍をした」

とあり、独自の仕事場と技術を必要とする職業である。特定の職人などの作業着としての刺子頭巾・刺子半纏（はんてん）あるいは武道着・陣羽織・神祇装束等々、刺繍の需要はかなりあったのだろう。

もともと三谷家は紺屋（こうや）を経営していたようであるが、紺屋経営の一面で、こうした布地と女性の技を主体とした「さし屋」も経営していたのだろう。単に刺繍のみではなく、高級呉服の仕立てなどの分野まで手掛けていく専門職として、女性主体の「女の館」があったのではなかろうか。町人文化発展の頂点にあたる文化・文政時代、在郷町横尾の発展の一面を示すものであろう。

四月バス例会
比婆山御陵と熊野神社を訪ねる

四月のバス例会は、県北比婆郡の伊邪那美神御陵伝承地と熊野神社を訪ねます。県北の山々はまだ春浅く、また登山も比較的長距離なので、今回の例会は健脚の方向きです。

《主な探訪地と概要》

▼伊邪那美神御陵伝承地…比婆山の山頂は、古来より国指定の天然記念物に指定されているブナの純林や、巨大な石を抱いたイチイの樹林に覆われた神聖荘厳な神籬（ひもろぎ）・磐境（いわさか）として伝承されています。山頂中央部には、直径約六〇メートルの円墳があり、伊邪那美命の陵墓とされ、往古から人々の信仰を集めてきました。

『古事記』によれば

「故、其所避之所伊邪那美神者、葬出雲国与伯伎国境、比婆山之地」

とあり、亡くなった伊邪那美命は出雲の国と伯耆の国の境にそびえる比婆山に葬られたと記されてあります。

▼六の原製鉄（たたら）場跡…県民の森入口付近の丘陵に遺構が残っています。鉄穴（かんな）流しに使用した洗池と、赤目砂鉄の採取から製鉄までの行程の跡を見学することができます。

▼熊野神社…主祭神は伊邪那美神、相殿には伊邪那伎神・天照皇大神・須佐之男神・大国主神・菊理姫（くくり）神が祀られています。

熊野神社の前称は比婆大神社といい、天平五年（七三三）に創建され、御陵の遥拝所として古来から人々の信仰を集めてきました。嘉祥元年（八四八）に社名を熊野神社に改めたと伝わります。大冨山城主の宮氏の崇敬を受け、文亀二年（一五〇二）には宮親盛が社殿を造営しました（『芸藩通志』）。地元の伝承によれば、明治初期には参拝が大層賑わい、例祭当日には御陵の広場に土俵が設けられ盛大な草相撲が奉納されたとか。

境内へは登山口から二十分ほどです。昼なお暗く、壮厳な境内を醸（かも）し出しているのは、百本を超える大杉群です。この内、目通り周囲五メートル以上の、十一本の老木が県の天然記念物に指定されています。

神社から少し登った所に苔むした花崗岩の巨石がありますが、辺津磐座（へついわくら）といい、比婆大神社が創建されるまで古より人々が山頂の御神陵に向って祀りを執り行った場所と伝わっています。さらに登ると、二の宮・三の宮がありますが、熊野神社が原始神社形態に合致していることを示しているといえます。このさらに先に「那智の滝」があり、七十メートルの断崖から落下するさまは備北随一の壮観といわれています。

その他、時間が許せば、国の天然記念物に指定されている「熊野の大トチ」も見学したいと考えています。

【実施要項】

《講師》種本実さん（歴民研部会長）
《実施日》四月二二日（日）
＊当日雨天の場合のコース。
福山→上下町→西城町歴史民俗資料館→中野八幡神社→神宮寺→熊野神社→六の原鉄穴流し跡
《集合・出発時刻》午前七時四五分
★時間変更注意！集まり次第出発
《帰着予定時刻》
午後六時三十分ごろ
《集合場所》福山駅北口観光バス停
《参加費》　会員　三三〇〇円
一般　三八〇〇円
（傷害保険料・資料代含む）
《募集人数》四八名（申込先着順）
＊現在、二六名の申し込みしかありません。このままでは大赤字です。
《申し込み》事務局に電話で
《受付時間》午後八時～午後九時
《その他》弁当・飲物は各自持参持。
また、登山のできる服装・靴でご参加下さい。タオル・下着の着替えや雨具の備えも必要です。

マイダイアリィ抄録

種本　実

二月三日（土）

定例の読書会。今回の課題図書は『北条時宗』。今年の大河ドラマにちなんだのだが、同名の本は数冊あって、浜野卓也著の今月の小説はどう読まれただろうか、出席者は何人ほどかな、などと、本を選択してからというもの気がかりであった。選んだ者が言うのも何だが、史実に沿った展開の八尋舜右氏等の著作と比べると、フィクションを取り入れた分がやや軽薄に感じられた。

案の定、面白くなかったとの率直な声が聞かれた。が、十二人という今までにない多数の参加者の談論風発で、予定の二時間は短く感じられた。「為政者としての時宗の姿勢を現代の政治家は見習うべきだ」。私利私欲に走る昨今の政治家を糾した指摘が印象に残る。

二月五日（月）

午後七時から備探の会の役員会。いつもは帰宅後、急いで夕食を済ませて臨むのだが今日は仕事が予定通り進まなかったので、職場から空腹を抱えての出席。寒波のせいか出席者は少なく、半数ほどか。

今夜の議題の中には、事務局長交代に伴っての諸会務の分担と会報の内容の検討などがあった。侃侃諤諤の議論が交差しつつも、これまでの二十年の積み重ねを基に、当会も益々充実の一歩を踏み出すのだとの思いを抱きつつ家路につく。

二月十日（土）

今日から三連休である。暦通りに休める身の上をありがたく思う。祝祭日なんか縁がない勤め人も珍しくない昨今だから。

連休初日は奈良薬師寺詣でである。夏に北海道ツアーへ家族で参加した時世話になった、某旅行社から頻繁にダイレクトメールが来る。家族三人での薬師寺行は、そのメールを読んだ妻の提案に賛同した。

平山郁夫画伯が三十年間を費やして、昨年末に完成された大唐西域大壁画の見学が目玉のツアーである。正午前に着いた薬師寺は、幸運にも度重なる兵火に遭うことを免れた、裳階を擁する東塔のみが飛鳥時代の面影を残す。

金堂に安置されてある薬師如来像と左右に控える日光、月光の両菩薩像を見学して、その柔和な尊顔に心和む思いがした。

玄奘三蔵院に祀られてある壁画は、二・二メートル×四・九メートル。使用された和紙は、古の伝統を誇る越前和紙の特注品である。そこに描かれた、玄奘三蔵の求法の精神は「明け行く大雁塔」（中国）から始まり、「ナーランダの月」（インド）までの七画面で構成されている。

今から千三百年前の苦難の旅は、『西遊記』として、私たちに愛読された物語となっている。壁画で見る西域はほんの一部でしかないが、それでも画伯の筆致を通して、雪を抱いて屹立する山脈、灼熱の砂漠、怒涛の流れを擁する大河などが目を奪う。何時の日か、私も玄奘や、画伯が歩いた西域を訪ねてみたいものだとの思いがほとばしる。

二月十一日（日）

今日は午後から小野田寛郎さんの講演を拝聴する予定であるが、県立歴史博物館の解説ボランティアの活動日でもある。ところが、開演の時間を確認したところ午前中に終わっていた。勝手に午後と思い込んでいた自分を責める。

気を取り直して、予定通り県博に出かける。今日は入館者が多かった。福井からという若い男性は、同様の博物館に勤務していて、弥生時代の土器を研究していると言う。倉敷や広島、大阪など市外からの来館者が多いのは毎回のことだ。

勘合貿易の説明図の前で、当時は朝貢だから明国から日本に商いに来ることはなかったと思うがどうか、との高校の先生からの質問に答えることが出来なかった。解説ボランティアとはいうものの、時折、専門の方々からご教授いただくこともあり、それがうれしい。

二月十八日（日）

備探の会の例会。普段は気ぜわしい生活。土・日はゆっくりくつろぎたいけれど、今日の例会は久しぶりのバス例会であるし、かねてより登ってみたかった金川城なので早めに、お手をかけず間違いのないようにファックスで申し込んでおいた。

大げさでなく、入会して今日ほど感激した例会もなかった。圧巻は金川城の現存する遺構群。本丸を囲む幾壇もの曲輪と掘切、深い三つの井戸が往時を偲ばせる。さらに妙覚寺の伽藍と石仏・美術品などの文化財にも一見の価値があった。反省会での美酒と団欒では、一日の疲れと、このところの心身にたまっていたストレスを一気に吐き出した。有意義な一日であった。（二月二十二日記）

絵馬あれこれⅡ

熊谷　操子

「絵馬の起源と変遷」は十三年前の会報四十一号に発表させてもらったので、今回は省略させて頂く。

昭和四十七年十二月、浜松市伊場遺跡の奈良時代の地層から発見された絵馬は、わが国最古の実物遺品といわれている。縦七・三センチ、横八・九センチ、厚さ〇・五センチの板に、墨で描いた馬の図で、胴の部分に深い朱が残っていたとか。

筆の運びは軽妙ではあるが、鼻の部分や、足首や蹄の形は模写をみてもなかなかよく描けている。出土場所が池か沼跡と推測されるような泥水質の場所であり、朱が残っていることも考え合わせて、止雨か日乞いのために水神に捧げたものであろうといわれている。

余談になるが、当麻寺の曼荼羅堂解体修理の際、天井裏から発見された鎌倉時代の小絵馬や、秋篠寺所蔵の小絵馬などの、あの戯画風な一筆描き様の筆致が、どこか似ているような気がする。少し時代は下るが。

小絵馬　室町時代の中期以後、馬以外のものが描かれるようになった小絵馬の絵柄は、その願いを端的に描いたものが多く、誰もがすぐその願いの内容を判じることが出来る。いつの日か心にしまい込んでいた風景とが自然に重なり合って、思わず涙を誘われるような図柄もある。

栃木県足利市の大手神社には、手や梭の絵馬が何万枚も奉納されているとか。それは、越・能登・加賀・武蔵・相模・上総・下総・甲斐方面の貧者の十二、三歳から二十歳位の娘を桂庵が人身売買にも等しい約束の年季奉公で機屋に連れてくる。金銭的なくわしい内情を機屋から初めて聞かされた娘達は哀れである。

一日も早く仕事が上手になって家に帰れる日を夢見た悲願の現れがこれらの絵馬で、堂の中にこもっている切実な祈願の声々から、魂を揺さぶる望郷の唄が聞こえるようで哀れを誘う。満願に際しては、その喜びを素直に表す敬虔な態度が見えるから、思わずほほえみたくなるものもある。

いわゆるこれらは氏族信仰に支えられた物であるから、民俗的に貴重な資料といえるのではないだろうか。

大絵馬　大絵馬と小絵馬の分類は決定的なものではなく、春日大社の絵馬を基準として、その大きさが三十センチ前後として、それより大きくて扁額形式のものを大絵馬といい、三十センチ以下の吊懸式のもの（中には拝殿や柱や壁に打ちつけたものもある）を小絵馬といっている。この分類は、あくまでも一応の目安だといわれている。

概して大絵馬といわれているものは、多くは専門絵師が筆を揮い、芸術的にも価値ある作品が多く、奉納の意味も小絵馬のような切実な真剣な祈願というより、自らの行為や、業績を記念して奉納したり、感謝の意味で奉納したりというのが多い。

その内容は武者絵や物語風のものが特に多く、当時の有名な絵師がその名を堂々と連ねている。

中世末に兆しをみせた絵馬の大型化はいっそう進み、大きい絵馬堂や、拝殿や、寺の外陣等に掲げている。絵馬を観る場所が場所だけに、あるいは無愛想な画廊かも知れない。でもその反面、慶長十三年（一六〇八）豊臣秀頼建立の北野天満宮の絵馬堂や、寛延元年（一七四八）建立の讃岐金比羅宮の大絵馬堂などは、開放された気楽な美術館といえるのではないだろうか。

京都の清水寺や、奈良の長谷寺は大きい本堂に舞台をもち、それが絵馬奉納所となり、絵馬堂と同じ機能をもった。翼廊の広い板張りは、長材を縦横に組み合わせて作ったもので、豪商らの寄付によって造営されたという。この外陣や回廊には、長谷川久蔵・狩野山雪・狩野永納・海北友雪等各派の絵師が奉納している。これらは扁額式の大絵馬だからこそこの場所で映えているのだと思う。

歌仙図大絵馬　三十六歌仙は平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて描かれるようになり、絵馬額として奉納が始まったのは室町時代以降らしい。もちろん、その目的は和歌の上達を祈ったものである。

平成六年に高田郡吉田公民館で行われた絵馬展では「よくぞ集めた」といいたいほど夥しい数を近在から集めていた。その中には三十六歌仙図も極めて多かった。北野天満宮絵馬堂の庇にも相当掲げてあったと思ったが、とてもその比ではなかった。

百人一首がとりわけ好きな私は、その場をなかなか離れることが出来ず、しばらくは張りついたままだった。

備探の例会で二度行ったことのある清神社のは相当古いらしく、他の社寺の歌仙図より表面の風化、色彩の脱落が著しく、歌の文字の判読もむつかしかった。でも周縁部の細い枠木の止め釘に飾り金具を使用してあったのが、とても印象的であった。

美土里町日吉神社のは珍しく三十四枚も揃っており、傷みも少なく、

高田郡内では最も多い遺存例であるとか。掲げる場所にもよるだろうか。

向原の養康寺のは、六人分を横長に並べ、それを一枚の扁額にまとめて、歌の部分の下地は白塗りにしてあった。歌の文字がはっきりと読めるようにとの心配りであろうか。

近江の海津天神の歌仙図は、七人組で、衣服の柄など特に美しいと思った。それもその筈、背面の墨書銘には長谷川左近とあり、奉納の趣意が細々と記されてあるとか。珍しい。

三人物としては、柿本人麿を扱った場合、たいてい朝霧の立ち込める明石の浦の曙の様子を背景に添え、人麿と小野小町と僧正遍照の三人と相場が決まっているらしい。

歌仙図絵馬で面白いのは、武者絵などの大絵馬のように、余すところなく色を塗ったりしないので、それぞれに特徴ある木目が見えている点である。これらも見どころだと思う。

珍しい絵馬　備探の例会で行った御調八幡神社の絵馬堂で、馬の蹄鉄の小絵馬を観た。六十余枚のうちでいちばん印象に残ったもので、家族同様に扱っていた愛馬の思い出に掲げたものだろうと想像した。

「なにッ、この黒い塊は」

甲奴郡宇賀八幡神社の二十数枚の中で特に目を奪われた「ケラ」の絵馬だった。精銅の過程で出来るこんなものがと、けげんな思いだったが、その昔この周辺にも銅山があったのだろうと思い巡らしたひと時だった。

向原町琴比良神社奉納の「亀と老婆図」の大絵馬は気味悪いのひとこと。それは、上半身は裸で白と青の腰巻だけ着けている老婆が、大きい亀に乗っている姿で、その老婆の表情がなんともすさまじく、何かしら妖気を漂わせているのである。願主の意味も不明で、謎の多い作品だというから尚更気味の悪い作品だった。

たびたびの移転や火災に、その運命を翻弄された清音村の軽部神社の、小さな祠の中を見て驚いた。

さまざまな乳絵馬が、所狭しとばかり奉納されている。初め数えてみようと試みたがとてもとても。布で乳を象ったもの。丸い花崗岩の先に黒い乳頭をひっつけたもの等々。

この地方に悩み多い女性が特に多かったのか。あらたかな霊験が遠距離まで知れ渡っていたのかと想像を逞しくして、自分も「乳癌になりませんように」と真剣に拝んでおいた。

社をあとにしながら、ふと磐台寺や京都法界寺の乳絵馬を思い出したり。

北前船、北国船などの遭難は実に多く、日本型の船は構造上、浸水しやすい上に、日本海の怒濤は海難をさらに多くした。大時化に遭うとまず帆を下ろす。帆柱を切る。積荷を全部海に捨てる。碇を綱で垂らす。そのあとにすることといえば、男の命ともいうべきチョン髷を切って、ひたすら水神に祈るのみである。

このチョン髷は後日、御城米等の大切な積荷を海へ捨てた詫び役。もし、命を救ってもらったら神仏への何よりの奉納品ともなったのである。

群馬県邑楽郡三島神社に奉納されている「堤防工事図絵馬」の写真には驚かされた。それに描かれた人間の夥しい数にである。

土を運ぶ者、杭を打つ者、馬を使ってたくさんの砂袋を運ぶ者、材木を挽いている者、その人達のそれぞれの表情や筋肉隆々の腕や、鉢巻の締め方までリアルに描いてある。たびたびの洪水に見舞われた人達がこの落成をどんなに喜んだだろうかと想像する。

北条時宗　平成三年のある日、私は『小絵馬図聚』北条時宗著限定五百冊申込受付中という広告を見て、価格も聞かず○書店へ注文した。何ヶ月か経って忘れたころ「ご注文の本が来ました」という電話。

それに面会してみると、大きさも装丁も箱も立派。価格もとびきり立派で五万円という。この価格には少なからず戦いた。でももうどうにもならない。自分が注文したのだから。二、三ページめくった時、一瞬私の頭は混乱した。その内容は私の本棚に温存してある何冊かの絵馬の本の中にあるものばかりであった。ただ、そのいくつかには、肉筆の鮮やかな色が施してあるだけ。見る人が見れば値打ちのある本かも知れないが、私はただ「いっぱい食わされた」と歯ぎしりの状態で、思わず「馬鹿奴」と自分を罵った。あとがきには、本名北条治宗。ペンネーム北条時宗。これをトキムネと読んではいけないとヌケヌケと書いてある。

あの擾乱の鎌倉期に執権時宗が小絵馬を描いたり、集めたりするかと、冷静な判断と考察力があれば、こんな不細工な失敗はしなかっただろう。

ものいわぬ絵馬をなかだちとして当寺の人達の暮らしの一断面を覗くことの出来る絵馬堂や拝殿は、ささやかな歴史を識ることの出来る小さな秘境だといわれている。まったく。

青森県深浦の円覚寺にある、重要文化財の北国船の大型船絵馬と、生と死のはざまで、必至に祈り続けた猛々しいまでのチョン髷の絵馬は、是非とも観に行きたいと思っている。この絵馬バカが治らないうちに。

鬼ノ城に赴いて

七森　義人

今回は記念号であるので、昔を思い出しながら、私の最初の例会と、最近ちょっと疑問に思っていることを書いてみる。

いま「私の最初の例会」と書いたが、これよりも前にも例会はあった。しかし、それは会員のみの例会であって、新聞に載せて一般の人の参加を呼びかけたのは、私が初めて講師を務めた鬼ノ城例会からである。

では、題して「鬼ノ城に赴いて」。

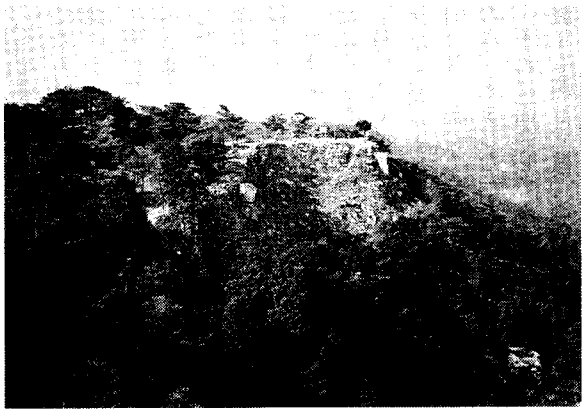
新聞に初めて載せたということで、参加者がうまく集まるかどうかかなり心配をして福山駅に七時三〇分に集まった。現在ではさほど珍しくないが、当時はずいぶん早い集合時間だった。幸い応募者全員残らず集合したので、七時五〇分ころ福山駅を出発。伯備線の総社駅に到着したのは九時ころであった。

まず最初に、駅前の喫茶店に入って今日の行程の説明・自己紹介をして出発。そのころは神谷会長の影響で喫茶店で一日の予定を話してから始まるのを恒例としていた。鬼ノ城の入り口までタクシーに分乗したが、一月なので砂川公園から新山への山道が雪でスリップするのではないかとひやひやしながら登っていった。しかし、「鬼の釜」の横を通って鬼ノ城の駐車場に無事到着。帰りの時間をいって迎えに来てくれるように頼んで降車した。

鬼ノ城は、当時と現在とでは発掘調査等の関係で分かっていることがかなり違う。最初、私は地図を渡してオリエンテーリングの様に一人で見学してもらおうと考えて、要所要所に木に紙を張り付けていたが、相談の上、全員で回ることになった。

現在、角楼とされているところは当時、門の跡と考えられていた。ここから時計とは逆回りに城を一周するように歩いて行き、水門跡の上の土塁、水門の穴、水門の上の池跡（藪の中をくぐって見た）を見た。道沿いには石に彫られた観音像などもある。かなりきつい坂道を下って第一城門跡、現在の東門跡を見た。いまこそ道が良くなったが、当時は下る道と水平に行く道の二種類があり、足の弱い人には水平の道を通ってもらった。

そしてあの石垣の写真で有名な突端部へ。この突端部から真下の血吸川や国府跡推定地、吉備の中山等の眺望を楽しんだ。その後、左に池跡を見て一周するように再び最初の角楼の展望台へ。ここで最後の景観を楽しんだ後に駐車場へ向かい帰路についた。福山駅には五時ころ帰着。



有名な鬼ノ城突端部の石垣

原稿を書くにあたって会報の復刻版を読んでいると、当時の写真が載っていた。このとき参加されていた〇〇氏はどうされているだろうか。

閑話休題。

年始のとある日、会社で初日の出の話題がでた。そのときに同僚のN氏が新市町の山岳会に入っているので今年は蛇円山に登ったとの話、そのときに話の途中で「野呂往還（のろおうかん）」という名称が出てきた。

この名前を聞いたのは（知ったのは）いつであったろうか。たしか高校時代に図書館で『蛇円山風土記』という本の中で野呂往還という名前が図の中に出てきたと思う。

最初、この名前が鞆街道・笠岡街道のようにその行き先の土地の名前と思っていたが、この野呂という集落がどこにあるかわからない。その後、この野呂往還が藤尾鉱山の鉱石を運んでいた道と聞いた。

新市町の『四五迫（しごさこ）城跡』という報告書を読んでいると、野呂往還は神石郡の来見から四五迫城跡を経て吉備津神社へ通じる道と書かれていた。少し方向が変わるが、四五迫城跡から南東に行くと大坊（福盛寺、真言宗）がある。大坊の山門付近には野呂部という地名がある。また、野々倉という地名が藤尾から蛇円山の中間地点にある。この野々倉あるいは野呂部が野呂往還の地名の由来となったのだろうか。

「野呂」とは、山がうねうねとなだらかになっている様を指している、と地名辞典に出ていた。鉱石のように重いものを藤尾から山の尾根を利用してのろのろと麓に降ろしていたと考えればつじつまが合うのだが…。誰か野呂往還のほんとうの名前の由来を知っていたら教えて。

信長の指紋

佐藤　秀子

「ばっちゃん」「はい」「ばっちゃん」「はーい」を何度もくり返しながら陽の当たる窓辺で孫と一緒です。ゆったりとした時間をもつことは、心への御馳走です。戦国を駆けぬけた武将たちも、戦の合間に茶会を催し、しみじみと、昔や今、先行きのことを語り、至福の一時を過ごしたことでしょう。

『鞆ノ津茶会記』は井伏鱒二の著作。表紙は青緑の網の模様、渋い若草色の見返しは茶室へ続く柴垣が描いてあって、本を読む者の気持ちを静めてくれる装丁です。茶会での雑談といふことにした…と著者が書いていますが、教えられることも多く、人物の設定も本当に上手に書かれているのでつい引きこまれてしまいます。

この本文中に天正二十年（一五九一）十二月二十五日に安国寺内での茶会、主人、安国寺恵瓊長老、客人五名のくだりがあり、掛軸は長老が小早川隆景から拝領の一遍上人筆「南無阿弥陀仏」。茶会にかける掛軸は、それぞれ由緒があって、織田信長が愛蔵していたものは牧谿という禅僧画家のものです。世界に今では、たった十数点しか残っていなくて、足利将軍家以来、最高の画家と賞賛され、茶人や権力者を夢中にさせた謎の中国人なのだそうです。

この牧谿の軸は天文二年（一五三三）から慶安二年（一六四九）までの茶会に四十七種が一二二回使われていて、絶大な人気だったそうです。十四世紀に輸入されて足利将軍家で使われていたものが、幕府の衰退によって美術工芸品は散逸し、これらを入手したのは戦国武将や茶人たちでした。

天正元年（一五七三）に堺の商人を招いた茶会でも、信長は途中で軸を持ち出し、すでに懸けられていた牧谿の軸の上に、重ねて懸けた。かっての将軍家を強く意識して、その権威と旧蔵品を引き継ごうとした意図がみられる…と『芸術新潮』の牧谿特集に書いてありました。

信長は本能寺でも茶会をしたり、好きな書画骨董をみようと、それらを取り寄せていて、牧谿の軸も客間に掛けていました。本能寺の変の時、隣室に泊まっていた茶人の宗湛が火の中から持ち出し、信長の想いは永らえることになりました。

牧谿の画は岡山県立美術館に二点あって、購入価格は三億円ほどだとか。鼻毛の老子を描いたもので、「老子図」が題名です。でも自画像だといわれていて、見ていると心がなごみます。

県立美術館で平成九年に「五島美術館の名宝展」があり、その図録は、絵や茶道具、軸、文、色紙等すべての展示品の伝来が書いてありました。今では国宝になっている中国元時代の禅僧の墨跡も朝倉氏―信長―丹羽長秀……と伝わり、信長の文物に対しての関心が残されています。図録中に「叭々鳥図」（八哥鳥…アジア東部や中国南部に生息）三幅対の中の一幅を信長が武将稲葉一鉄（一五一六～八八）に、和睦の記念として送ったという伝来があり、これも牧谿です。

さて、今では博物館の方は書画や文を扱うときは手袋をしていますが、信長は、どうしていたのでしょう。桐箱や軸のあちこちに信長の指紋が着いているとしたら、とっても嬉しいです。残っている書も少なく、遺体は炎の中。再々使用した茶室の掛軸は、信長が愛蔵していたものだからこそ、自分で掛けて替えたと思います。一五八二年（天正十年、本能寺の変）から四一九年経て掛軸に残る信長のぬくもりです。

戦の合間に相撲を観たり、宣教師との接見でも、たくさんの贈り物のうち一品しか取らなかったとの記述もあり、酒もあまり飲みません。茶会においては名物主義でしたが、欲張りではありませんでした。

先日、伊達政宗の子孫が墓を発掘したら、身長が一五九・五センチだったそうです。信長も遺体があれば、色々なことがわかって、過日発売された「信長は両性具有である」という不名誉な本なぞ、撫で斬りにしてやれるのでしょうが、残念です。

私は武将の普段の生活を書いた本が好きです。戦を仕事と考えるのは少しおかしいのですが、動と静のうち、凶人にもなりかねない戦は正常の判断を失って、その人本来ではない気がします。

戦乱の世に生きた人たちの精神的な糧は何だったのでしょうか。雑学的な歴史しか知らない私ですが、この会では、わからないことがすぐ質問でき、明快な答が返ってくるところがとても素敵です。会員の中にいると安心していられて、とても幸せです。信長のつくった安土城はとても壮大で、短いつかの間の夢もまたよかったのではないでしょうか。

二百号の時は、ちょうど七十歳くらいになります。二十歳になった孫と文学館と博物館を訪ねる旅をしていると思います。

身近なこと

杉原　道彦

探訪の会に入会しまして、早いもので八年が経過しました。会報に投稿するのは、これで三度目になります。この間、わが家には新しく三毛猫と子犬が家族に加わりました。もちろん、子供にせがまれて飼い始めたのです。二匹の面倒は期待にたがわず、今ではもっぱら妻が世話をしています。三毛猫は四歳五ヶ月で、猫に直接聞いてはいませんが、人の年齢で三十六歳のメス盛りだそうです。子犬は、生後九ヶ月になります。

私の子供のころは、農家なので牛や鶏を飼っていましたが、犬や猫は汚くて怖い物と親から言われ育ったせいか、最近まで動物を飼うなど思いもよらないことでした。近所の子供から、

「猫は、猫外道になるけぇ、きょうてぇんじゃ」

と聞いたのを覚えています。怖れていた猫外道とは何だったのか。国史大辞典の外道神を調べてみると

「中国地方などでいう外道神とはある種の動物による憑き物のことを言う。モグラより大きく、イタチより小さいなどというていどで必ずしも判然としていない。犬外道という言葉もあるように犬神と似たもののように考えている人もある。外道持ちといわれる家筋から嫁をもらえば外道もついてきて新しく外道持ちの家筋ができる。これをおとすには妙見を信仰するとか外道の黒焼きを飲ませるとよいという」

と書いてあります。

猫外道のことは書いてありません。少なくとも昭和三十年代後半まで私たち子供のあいだでは、目に見えない憑き物の存在が、信じられていたようです。

この原稿を書いている最中も、平成生まれの例の猫は、私の膝の上でグリグリ喉のあたりを鳴らしたり、パソコンのモニターの上に寝そべってこちらを見ています。子犬も時折外で吠えて番をしています。

今回も予想通り、始め私の両親は動物を飼うことに反対でした。飼い始めると、途端にみんな世話をやいて極上のイリコを買って来たり、子犬の昼寝の最中に

「散歩に行こうやぁ」

と本人たちは猫や子犬以上に喜んでいます。その後に聞いた信じられない話ですが、父は子供の時は犬を、母は猫をそれぞれ飼っていたそうです。

猫外道のついでに、子供のころの不思議な体験を二つ聞いてください。

一つは羽衣を見た話です。羽衣といえば、府中方面をご存知の方は味噌屋の名前を思い起こされるでしょう。確か、私が小学校にあがる前、二歳上の姉と見たのです。場所もはっきり覚えています。黄色や緑や桃色の長い布を、肩から足の先より長く垂らし、ひらひらと空を飛んでいました。残念ながら、私たちの他に羽衣を見た人を知りません。

もう一つは、小学校六年生の時に先生や同級生と見た未確認飛行物体の話です。学校の背後にせまる五殿山の後方に、アルミホイルで包んだ人工衛星のような塊がそれで、長い間空中に静止した状態で浮いていました。誰も写真を撮っていないので、会報に載せられないのが残念です。

そんな中学までを過ごしたS町のC地区は、百世帯の人口四百人を割り込んだ過疎地です。享保二年（一七一七）の記録には、戸数二百三十一、人口千七十五人を数え、今では半減しています。子供のころの畑や棚田は、数百年の時を越えてふたたび山野に変わり、住まいの跡も石垣を残して消えて行く運命にあります。

われわれ、探訪の会員の孫やひ孫がこんな石垣を見て

「城跡じゃあ、舘（やかた）の跡じゃあ」

と間違われないために、家屋敷の記録を残そうと思い立ちました。

五千分の一の平面図に、家や屋敷の跡を落とし込んで屋号や本家・分家の別、転居の時期や宗旨や家の伝承などを書き留めておきたいと考えています。十年ほど前のことです。地域の歴史に目覚めたころ地元に、維新前の何衛門や何兵衛や屋号を全部覚えておられた老人がいらっしゃいました。教えを請いに喜び勇んで尋ねましたが、

「もう年ぅひろおたけぇ、覚えちゃぁおらん」

とのこと。一昔前には、こんな物知りの方がどこにもおられたはずです。

猫外道や羽衣や未確認飛行物体の話は、今ではとても懐かしい思い出となりました。子供のころの、三十五年以上前の近所のおじいさんやおばあさんにもう一度、会いたくなりました。

歴史の嫌いな方は、歴史と聞いただけで、耐えられないそうです。好きな者同士の集まり、それが探訪の会です。これからは、歴史嫌いの方々にも生活に根付いた歴史に興味を持って、身近に歴史を感じられるよう努力を続けていかなくてはなりません。

「オ・クロコディル」

石井　しおり

二〇〇〇年四月中旬、訪欧に際しかねて約束しておいたストラスブールの三ツ星レストラン「オ・クロコディル」の客となった。まずはその名の誕生について記すことにしよう。

フランスはナポレオン皇帝の治世下で、エジプト遠征の時期があった。出征した軍人に、アケルマン大尉というアルザス生まれの青年がいた。彼は活動的で野山を駆け巡り、狩猟を好む若者であったという。

そんな折のある日、ナイル川に遊び、大きな鰐に出逢った。それは三メートルもあり、大格闘の末、やっと仕留めて野営地に引き揚げた。これには友人が驚き歓声を上げて、故郷へのおみやげにと進言する。

退役後、鰐をふるさとのストラスブールに持ち帰り、店頭に飾って「オ・クロコディル」という屋号の飲み屋を開業した。もちろん剥製である。

当時、珍しいエジプトからの賓客をひと目見たさの人達で店は大入りだったとか。それから一三〇年が過ぎた今は、鰐の話題よりもフランス料理の粋をもって、その名を欲しいままにしているのだとのことである。

近年、フランスのミシュランというタイヤ製造会社が、旅行案内用としてホテル・レストランを厳選し、発表しているガイドブックがある。そのうちで三ツ星の栄誉を与えられるのは、数万件中の二〇軒余りとかで、例年選ばれている「オ・クロコディル」の評判は凄いのだ。

私たちは当日、予約の七時前から軒下に並んだ。やがて各テーブル専属のボーイに先導されて入ると、五〇席余りの卓上には、すべて予約カードが立ち、案内されたのは正面一番奥の、大きな壁全体に架かる一枚の絵をすぐそばに見る席であった。

それには「一八七四年、グリゾン」と署名があり、ボーイに尋ねると「グリゾンは遙か遠くのボルドーの出身です。鰐のことは数千キロを離れた各地まで伝わり、彼はついに絵筆を抱えて逢いに来たのです。憧れのテーブルに座って大満足はしたものの、ゼニがない。致し方なく、代価としてこのタブローを描き上げたのです」

と語った。画面は四メートルもあって、そのころのストラスブールの情景、即ち人物・動物・風景などが、渋く重厚な筆致でセピア色にくすみながらあった。

さて、いよいよフランス料理究極の真髄に迫ろうとする美食の館の主、エミール・ユング氏の料理とは如何なるものか、少々緊張して待ち受ける。まずは食前酒が運ばれた。

シャンペンは、果物の香がして爽やか。フォアグラはさすがのものでとろける。牛ステーキはミディアム。舌平目のムニエルにギリシャ風野菜炒めなどなど。食彩の美しいことは目を見張るばかり、酒はフランスワイン、ゲビュルツラミネーの白。豊潤な美酒と芸術の域まで高められた料理のそれは、もう文化の領域に位置するのかも知れない。

最後のクロコディルという名のデザートはサバランスポンジ生地に、リキュールを浸ませ、キャップの上に木イチゴ・パイナップル・スターフルーツを載せて、上から果汁をかける。さらに頂上にアイスクリームを置き、その天にほおずき風の赤い果実があり、その細い葉っぱに粉砂糖を散らす。ほおずきを持ち上げると、お尻に金粉が吹いてあった。これこそフランス料理芸術の極限かと、しばらく嘆息し眺め入る。

美食の饗宴に喉の渇きを覚えて水の追加をと顔を上げる矢先、すかさず壁際に控えるボーイが「ガス入りですか、それともガスなしで」と柔らかな声で問いかける。

驚きの瞬間、客が今、何を欲するか、全神経を感じていることの的確さに恐れ入ってしまった。彼は注文の品をテーブルに供する時、必ずその産地と調理方法を説明して退く。そして待機し、賞味の反応や要求を漏らさず、キャッチし続けているのだった。

食事が大分進んだころ、ボーイにクロコディルの由来を尋ねると彼は、「では支配人に替わります。少々お待ちを」と鄭重にいい別室へ去った。

やがて映画俳優、サー・オリヴィエの風貌に似る優雅さを湛えた支配人、ジロース氏が近づいていらした。黒スーツに渋いネクタイの彼は「ジャポンからようこそ」と慇懃な物腰で、前述のアケルマン物語を述べられた。聞く私は逆上せ気味の態。

そのうちに予約席に要人が着いたのか、奥からシェフ姿の五十年輩の夫妻が挨拶に出向かわれた。私は先ほど支配人から頂いた店の栞を見ながら『これは紛れもなく鷹揚な店主と小柄な夫人に違いない』と偶然の僥倖を心から喜んだひとときだった。

店主・支配人・ボーイに至るまでその究極にあるものは「客のもてなし」の一点に集中する作業であると知った。財布は空になったが、ずっしりと重い何かを知ったのも事実だ。

冷汗三斗の沖縄旅行

門田　幸男

昔グリコはおまけをつけることで明治や森永のキャラメルに対抗した。新聞界では読売が巨人戦招待等のサービスで売上を伸ばした。長年読んでいる朝日は内容で勝負するという方針だった。それはそれで納得していたが、今年珍しく読者サービスで沖縄旅行を企画した。

私は飛行機が嫌いで、海外旅行なら一人勝手に行けと、家内には干渉せず、留守中はマイカーで奈良や熊野などを旅行することにしている。足の弱い家内は山上にある神社巡りは嫌がるのでちょうどいい。

怖くていやな飛行機だが、行き先が一度は行きたかった沖縄だし、費用がいままでのパック旅行の半額（二万円）、一人分で二人行ける計算だから乗り気になってしまった。近くの旅行者の企画なら広島空港発着にするだろうに、朝日新聞とJTBの企画なので伊丹発・関空着で空港への行き帰りに苦労した。

那覇に到着して最初の行き先は首里城だった。城門で一行と別れて金城町の石畳道を見に行った。高い石塀に囲まれた坂道である。

「金城で人を喰う鬼が女陰を見せられ、『この口は鬼を喰う口』といわれて驚いて崖から転げ落ちて死んだ」という昔話の雰囲気のカケラも残っていなかった。

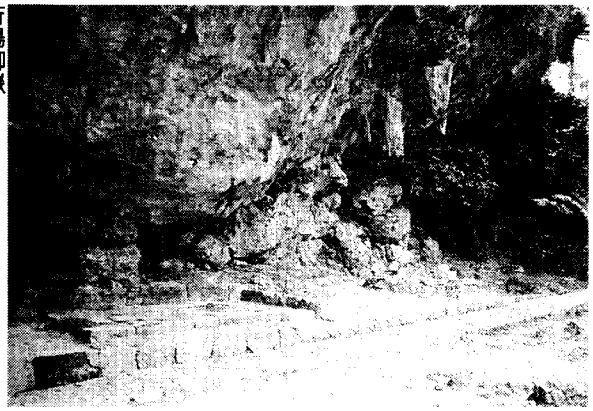
翌日はオプションで南部の戦場跡を回る企画があったが、運良くホテルの隣がレンタカー会社だったのでクルマを借り、沖縄へ行く主目的の斎場御嶽（セーファウタキ）（昔は国王が参拝する最高に神聖視された久高島の遙拝所）へ行った。観光客は立入禁止かと思って行ったのだが、誰でも入れる。建物等はなく、大岩の割れ目の奥に石敷きの遙拝所があるだけだった。誰も来ないひっそりとした場所だった。

岩の割れ目をくぐって入った場所は母胎とみなされていて、そこに入ると生まれ代わるとか、神と合体できると考えられていたのだろう。大岩から鍾乳石のような石が垂れ下がっていたが、どう考えられていたのだろうか。あるいは乳房がイメージされていたのかも知れない。

その後、せっかく沖縄まで来たのだからお決まりの南部戦跡の平和記念公園やひめゆりの塔などを拝んで回った。戦火に巻き込まれた無念の死をとげた私の同年輩の多くの若者のことを思うと、胸が締め付けられる思いでつらかった。

午後、今日の宿泊地へ向かい。万座毛や亜熱帯植物園へ寄ってホテルに到着。翌日はパイナップルパークに寄って那覇空港へ向かった。

ここからが大変だった。帰りの飛行機が遅れ、関空にも一時間遅れで到着。余裕のあるはずだった帰りの電車の時間まであとわすか、混雑の中、家内ともはぐれてしまった。しかし、難波駅の改札で会えるだろうと乗り込んだのはいいが、あわてて乗ったのは南海電車の快速で、予定していたJRではなかった。当然、家内と会えるはずがない。恥ずかしいやら、情けないやら、泣きたい思いで難波駅（旧湊町駅）までたどり着いた。案内書で聞くと、幸い家内は天王寺駅にいたので、ようやく合流。まさに冷汗三斗の思いであったが、駅前のバスターミナルから中国バスに乗って何とか帰着できた。



斎場御嶽
垂れ下がっている石は何を表わす？

さて、旅行に「みやげ」は欠かせない。ふつうこれを漢字で書くと「土産」だが、本来は「宮饌」である。神前に並ぶことのできなかった家族にお供え物（おさがり）を持ち帰ることから発した言葉である。

私の家内と二人暮らしで誰も待つ者がいないのだが、沖縄にしかないものを買った。宝貝をつなげた首飾りだ。なぜ宝貝というのかというと、昔中国では通貨として使っていたからだとか。「財」にも「貨」にも「貝」が含まれているのはそのためだ。沖縄の宝貝はすべて中国に輸出されていたそうである。

私はその形が女陰に似ているので子宝に恵まれると考えられたのではないかと思ったりしたが、果たしてどんなものか。宝貝の首飾りの呪力で福沢諭吉さんが数珠（じゅず）つなぎとなって私の所へやってこないかなあと期待している今日この頃である。冷や汗をかいた埋め合わせにね。

伏見酒処散策

足立 捷一郎

伏見といえば、信心深い人にとっては伏見稲荷大社、酒の好きな人にとっては灘・西条と同じく酒処、歴史の好きな人であれば、戦国時代の伏見桃山城、幕末の坂本竜馬の寺田屋、鳥羽伏見の戦場跡、明治大正生まれの方々にとっては伏見桃山陵などを思い浮かべる人が多いと思う。

伏見には、子供が小さい時、伏見桃山城の遊園地、伏見稲荷大社、城南宮に行ったことしか記憶にはない。

昨秋伏見の酒処を歩こうというイベントがあり参加した。宇治方面への乗り換え駅でもある京阪電車中書島駅に集合、約三十名の団体である。

最初にすぐ近くの三十石船発着所伏見港に行った。

宇治川は上流より派流が分かれ、伏見の街を巡り廻わって、また宇治川へ流れている。その場所に伏見港の船着き場所があり、きれいに整備されている。三十石船も浮かべて、一帯は伏見港公園となっていて散策する人が多かった。

宇治川の派流に沿って川辺りの散策路をさかのぼって行くと、京都方面から流れてきた旧高瀬川と濠川とこの派流の三川が出会う場所に、水路を整備した角倉了以の記念碑が建てられている。

つづいて川辺りの散策路を歩いて行くと、対岸の道の上に坂本竜馬で有名な寺田屋の提灯が見えた。この道の下も船着き場になっている。川辺りの散策路より道路に上がり京橋を渡って旅籠「寺田屋」に行った。

勤王倒幕の急進派の薩摩藩士有新七らが、島津久光の命を受けた温和派の同藩奈良原喜八郎らに斬られた所であり、また、坂本竜馬が長州藩三吉慎蔵と一献をかたむけている最中、幕府の捕手に囲まれているのを気付いた入浴中のお竜が、裸のままで二階の竜馬に告げた所である。竜馬は手傷を負い、伏見薩摩藩邸に救助を求め西郷隆盛にかくまわれた。

九烈士殉難碑、坂本竜馬遭難碑が建っている。

最近近くの商店街を「竜馬通り」と呼んで活性化をねらっている。

つづいて川の対岸にある酒蔵の白壁と両岸の柳が目にやさしい川沿いの道をたどって、朱色の土塀と唐様（竜宮造り）の山門のある長建寺に行った。

「島の弁天さん」と親しまれた所で、桃山丘陵の南端に平安中期に建てられた寺をこの地に移し、「八臂弁財天」（八本の腕を備えた弁財天・鎌倉後期作）を祀った場所である、京都では唯一の弁財天を本尊としている。

この中書島一帯は、江戸時代から東西交通の要衝で、水陸交通の繋ぎ目にあり、遊郭があった所で、寺を囲む朱色の土塀はその名残である。

つづいて月桂冠創立三百五十周年記念事業で昭和六十二年に公開された「月桂冠大倉記念館」に行った。

伏見の歴史などとすり合わせながら、酒造りの道具等を展示していて酒造りが順序よく理解出来るようになっている。

三種類の酒が試飲でき、おかわりもできる。帰りに一八〇ミリリットル瓶入純米酒を土産にもらった。

酒処伏見の歴史は古く、弥生時代にすでに始まったとされている。良質の水が湧くため、酒造りが始まった所である。特に伏見城が築城され伏見が城下町となり、酒の需要が増大した。その後桃山城は解体され需要は減ったが、参勤交代が始まったため、港町として発展し、再度酒の需要が増大した。

「神聖」の酒蔵などを見て、近くの西岸寺に行った。この寺は別名伏見油掛地蔵といわれ、第九十二代伏見天皇の信仰が厚く地蔵堂が建立された。高さ一・七mの石仏で、昔から油をかけて祈願しているため、重なった油の層で黒光りしていた。

境内に芭蕉の句碑がある。「我衣にふしみの桃の雫かな」と刻まれている。この寺の任口（宝誉）上人の高徳を慕って訪ねた芭蕉が、出会いの喜びを伏見の名物であった桃にことよせて詠じたものである。

つづいて「黄桜記念館」に行き、酒造りのパネル展示、テレビで有名になった黄桜の昔なつかしいコマーシャルやポスターそして小島功、清水昆のカッパの挿し絵展示を見学、付随する「カッパ天国黄桜酒場」で昼食を摂った。酒の酵母を使用した地ビールが好評で、沢山の人が注文していた。これでイベントは終わったが、午後は希望者のみ少し離れた所にある漬物の老舗「大安本社工房」を見学することにした。

大安のマイクロバスが迎えにきてくれた。午前中は朝日新聞社をはじめテレビ局の取材があり、大変混雑していたそうである。聖護院かぶらを職人が薄く切って、昆布をはさみ漬け込んでいく。一週間程度樽に寝かせるそうである。樽出しの「千枚漬」をはじめ各種の漬物を試食した。漬物のお土産をもらい、帰りもマイクロバスで駅まで送ってもらって、今日一日の散策を終えた。

雨ニモ負ケズ…

片岡　美絵

二〇〇〇年十二月十七日（日）午前六時三〇分。目が覚めると、見事に雨が降っていた。それも、

『こりゃ、一日降るかな』

というような雨が。

今日は中止かなとは思ったけれど、まあそれでもと思い直して、朝ごはんを食べ始めた頃に電話がかかってきた。

「雨は降っていますが、講師がどうしても行きたいということなのでやります！参加しますか？」

「…せっかくなので行きます」

今回の例会『常城推定地を探る』は、二〇〇〇年一月に雨で中止になった同じ企画のリベンジ版だそうだ。それをまた中止にするのは、よほど悔しかったとみえる。

「人間が自然に勝とうと思うと、もう気合と根性で勝負するぐらいしかないのかもしれないな～」

なんて、その何時間か後には自分も参加するのも忘れて他人事のように思ってしまった…。

府中駅からタクシーに分乗し、七つ池まで登る。そこからまず、旗立岩を目指した。雨はほとんど降っていない。参加者の中に行いのいい人がいたとみえる。

旗立岩は

「ここに旗を立てれば、遠くからでもよく見えるだろうな」

という場所にあった。山城というのは見晴らしのいい場所が多いと聞く。けれどもここも眺めがすばらしい。

旗さながらその岩の上に、ハンドマイクを持ってすっくと立った講師から常城についての説明をしていただいた。

常城というのは、文献には名前が載っているけれど、現在場所が確定されていない備後国の古代の山城のこと。その推定地が二説あるので、ちょっと現地に行って考えてみようじゃないかというのが今回の例会の目的らしい。

この山城は、朝鮮半島の白村江の戦いで大和政権と百済との合同軍が唐・新羅軍に大敗した後、その日本侵攻に備えて九州から畿内の各地に造られた城のひとつだという。

当時の城は広大な面積を土築や石築で囲い込み、その中で生活していけるようなものだったらしい。いただいた資料の地図におおよその位置が書いてあったが、府中の市街地がすっぽり入りそうな広さだ。

今私たちは、新羅が攻めてくることはなかったということを歴史として知っているわけだけれど、当時の人たちにそれがわかるまでどれぐらいの時間が必要だったんだろう。いつ攻めてくるかわからない、攻めてくるかどうかすらわからない敵をこの山城の中で待っていたのかなぁと思うと、なんだか気が滅入ってくる。本当に大陸から軍勢が攻めてくるのは、これより何百年もあとで、しかも唐・新羅じゃなくて蒙古なんだよね。そういえば、来年の（もう今年だが）大河ドラマは北条時宗だったな～。そんなことをぼんやり考えていたら説明が終わっていた。

「これほんとに道なの？」

と聞きたくなるような細い道を通り、次の場所へとずんずん進む。進むに連れて顔にかかる枝葉が多くなる。目印もない山の中をよく歩けるなぁと一人感心していたら前のほうから講師の声が聞こえた。

「すいませ～ん！道、間違えました」

「…」

その後すぐ道は見つかり（さすがだ）南御堂跡を見て、昼食となった。この頃から雨足が強くなってきた。どうやら、どなたかの善行のご利益もこのあたりまでのようだ。昼食後は、みんな合羽を着込んでの出発となった。

東御堂跡を見た後、青目寺で休憩を取る。その後、日枝神社、金龍寺と見学し、ついでに日本一の燈籠を見て府中駅で解散となった。

寒さに弱い私は、ひたすら歩き続けた午後だったが、青目寺の手水鉢と、日枝神社の狛犬は印象に残っている。どちらもとてもかわいらしくて、庭におきたいぐらいだった。

学生の頃、試験があるたび呪文のように年号を覚えたものだけど、その中に『六六三年　白村江の戦い』というのが確かにあった。

その時は単なる文字列にすぎなかったし、試験の点数で言えば五点ぐらいのもの程度の思いしかなかったけれど、こうして関係する場所に行ってそこで説明を受けると、年譜の中では一行でも、そこに人がいていろんな思いがあって歴史ができてるんだということが実感できる。その場所が身近なところであればあるほど、自分も歴史の中にいるんだという思いが強くなる。文献だけでは感じ取れない思いが現地には確かにあると思う。

そういう体験をする機会を与えてくれるこの会に入ってよかったと思う。講師の七森さん、事務局の皆さんありがとうございました。

雪の安土城を訪ねて

赤松　雅子

一月七日、二十一世紀最初の会の行事、青春きっぷの旅で滋賀県安土町へ行きました。早朝五時、福山駅集合、十時二十分、安土駅に着きました。三十分くらい歩いて、まず、滋賀県立近江風土記の丘の中心施設、安土城考古博物館を訪ねました。

弥生・古墳時代コーナーには、大岩山遺跡出土の銅鐸十個を展示。弓矢を持っての鹿狩や、杵を持った人が両側から臼をつく図など、銅鐸に線刻された弥生人の生活を拡大写真にしたりして、展示方法にも工夫がこらされています。また、弥生の木製祖霊像など表情が分かるほど腐食せずきれいに残っていました。その他、古墳時代の鉄製甲冑、馬の面当、鉄地金銅張の前立、透かし彫りの轡などの馬具は、芸術的といえるほど素晴らしいものでした。一方、安土城コーナーには、出土した丸瓦、信長愛用の刀の鍔（重文）や、袴・陣羽織など多くの遺物、巨大な安土城のジオラマ、さまざまな城郭施設の模型が展示してありました。

次に博物館南の「信長の館」へ。平成四年（一九九二）、スペインで開催されたセビリア万博に出展された安土城天守を展示。五、六階部分が原寸大に復元され、朱塗りの柱や金箔、彫刻や襖絵など、豪華絢爛な安土城の往時を垣間見ることができました。その後、博物館の会議室などで各自昼食をすませ、いよいよ安土城跡へ向かいました。案内役は大津在住の会員、末森清司さんです。

安土城は近江国のほぼ中央にそびえる織山（観音寺山）から北西にのびる一支尾根の安土山に築かれた織田信長の居城です。この山は標高一九九・二mの低い山ですが、峯がラクダのこぶのように連続し、峰と峰の間にいくつもの谷が形成され、低い山の割に谷は深く険しくなっています。また、現在は干拓によってその姿を失っていますが、かっては弁天内湖・伊庭内湖という琵琶湖最大の内湖群に三方を囲まれていました。

「安土」という呼称は、築城以前、安土寺と称する寺院があり、その名前を採って天正四年（一五七六）五月中旬、起工時に信長自身が命名したといいます。古代から信仰の山として崇められていたようで、絶好の場所を選んだようです。

滋賀県は平成元年（一九八九）発掘調査に着手し、二十年計画で環境整備を進めています。その調査成果の一部をここにまとめてみます。

――大手道は山野南西正面中央部の谷を利用し、幅員約九m、両側に一・二m、深さ〇・九mの石溝を伴う。道の両側には、基底部三・六m、推定高三mの石塁が両側にそびえ立つ構造である。山裾から山腹まで一〇六m北へ直進して直角に西に折れ、やや狭めながら三〇m進んで、七曲がり状につづら折れして黒金門に向かっている。この部分の石塁は必要な部分のみ。黒金門内側で北に折れ、内部に続く。道に並行して一段下に幅約三m弱の側道が巡っている――。

石段を登っていくと、伝豊臣秀吉邸跡・伝前田利家邸跡・伝織田信忠邸跡など、よく知っている武将の名前が出てくるので嬉しくなりました。最高所に天守跡、東南側比高差一〇mに本丸、西側比高差六mに二の丸跡があり、現在二の丸は織田信長廟になっています。

着工後、一月あまりで信長は岐阜城から仮殿に移ったといいます。登ってみて驚くのは大小の石の多さです。石塁・道・石段・側溝とびっしり石で舗装された感じです。おそらく付近の山々から農民に石を運ばせたのでしょう。近国の諸侍、京・奈良・堺の商人の職人をかり集めて完成したのが天正七年（一五七九）五月十一日。その前、天正五年（一五七七）六月に「安土山下町掟書」を定め、城下町の体制も整えています。

しかし、心血を注いで築いたこの城も天正十年（一九八二）六月二日の本能寺の変により運命が暗転し、焼亡。わずか三年の栄華でした。一般には明智秀満（光秀女婿）が十四日、退城する際火をかけたといわれていますが、「イエズス会日本年報」には、織田信雄が城に火を着け、城下にも放火したと書かれています。

城内に摠見寺があります。信長は自らを「神体」と称し、「盆山」という一個の石を当寺のそれぞれの仏龕に安置。すべての領民に、信長の誕生日、摠見寺へ参詣して「神体」を礼拝するよう命じたといいます。

摠見寺は臨済宗妙心寺派の寺院で、開山は信長の大伯父織田信安の三男正仲剛可、代々信長ゆかりの者が住持となりました。安土山の西端に仁王門と三重塔がそびえます。三重塔の横、本堂跡から見た琵琶湖の眺めは絶景でした。いまの本堂は、当初の位置と違う大手道沿いにあります。

本丸を下りるころから雪が降り始め、途中寄ったセミナリヨ跡あたりから激しくなってきたので駅へと急ぎました。でも、寒さもあまり感じないくらい楽しかったです。ありがとうございました。

思い出の相方城再び

高橋　光子

昨日は節分。吉備津神社では祭火を囲んで夜通し数百年の伝統もつ「放談会（ホラ吹き大会）」が行われた。

今日は立春。集合場所の新市駅前は、かつてバドミントン仲間に誘われて、福山短大の史跡探訪行事に赤松さんと三人で参加したとき以来だ。その時の講師は今日と同じ、でもまだ独身だった田口会長だった。今回は思い出の相方城跡を再び訪ねる。

もう一人の講師、地元の平田雅郁さんの先導で、福塩線新市駅の南側にテレビ塔を頭に簪のように載せた城山を目指す。標高一九一メートル、駅からの直線距離は七二〇mである。

まず、芦田川の沈下橋を渡って、宇喜多（浮田）基家の首塚と伝えられる古墓へ向かう。『備後太平記』『西備名区』『備後古城記』等に有地元盛の武功として郷土の人たちにはお国自慢の一つとして語り伝えられていたのだろう。この塚から出た壺は、近くの旭唱山本泉寺に大切に保管されていて、見せていただいた。

本泉寺はもとは真言宗。三代目城主有地元盛が熱心な日蓮宗信者で、法華本門の道場に改宗した。しかし、天正十年（一五八二）毛利氏とともに萩に移ったため、次男一族郎党を当山の守護とさせている。

新しく作られたブロック塀に鉄砲狭間、三角形の丸形の矢狭間が文様として残されている。

このお寺には、服部の大池で人柱にされたといわれている「お糸」さんの墓石がある。池の堀から出てきたのを新しい供養塔と一緒に手厚く祀られている。

寺を辞したあといよいよ相方城へ。昔歩いたときは、木々が茂っていて足下には水引草が一面に小さな花をつけていたのが思い出された。

砂防ダムの堤防を越えて昔の急な大手道を登る。中腹の猫地蔵で一休み、木が切られていて見晴らしがいい。しばらく休み再出発。テレビ塔の下に立派に石垣が見えてきた。南側だけは昔のまま残っている。北側は切り立った山肌。

中国地方の山城でここ相方城跡ほど立派な山城を残しているところはないといわれている。しかし、石垣の築造年代については城郭を研究している人たちの間で、諸説があって結論が出ていない。

山頂近くの石材は、岩盤と同じ花崗岩、石垣の方は自然石が使われている。端をげんのうできれいに整形した石、面を加工した石、矢穴のみられる切石、割石等、石垣石の発達の過程が一つの石垣でみられる。

石の積み方は自然石をそのまま積み上げる「野面積み」、槌をもって石の角を平らにして互いに組み合わせる「打ち込みはぎ」の混用で、隅石は長い石、短い石を交互に組む「算木積み」で崩れにくくしている。直方体の大きな石を一個だけ建てて積むのもみられる。

安土城とほぼ同時期、山城時代の末期に平山城の石垣をもった相方城は、山城から平城への移行期の姿を示し、山城の性格と平城の技術を併せもった貴重な石垣だといわれる。これは楠見・片山両先生の説。

枡形等の遺構は毛利氏の改修以前の有地氏のころのものらしい。本丸東方の石垣の年代、こんな壮大な石垣をもつ城が戦国時代に一国人衆に過ぎない有地氏によって築かれたとは考えられないという説もある。

織豊期の石垣と比べて検討することで築城の時代を考える説、有地宮氏と日蓮宗との関係、有地元盛の関連する本安寺・本泉寺も織田信長と同じ本能寺派、船運をもって各地の港町に拠点を構え、京都や各地の情報とともに城郭技術も一緒に入ってきて、立派な石垣ができたという説もあり、これからの研究課題も多く残しているようだ。

規模は小さいながら、本丸・二の丸・三の丸・出丸・西の丸・枡形門・堀切を挟んで東西の郭群と、よく整っている。

本丸跡からの眺めは、芦田川が目の前に西から東へと流れている。北方は府中が一望できる。左手には渕上城、広谷、正面は亀寿山城、東は神辺平野、晴れた日には岡山県鴨方の遙照山、笠岡の御嶽山も見える。

城山を下ると工業団地があり、周辺に多くの古墳が残っている。打ちっ放しのゴルフ場のそばに二基が復元されている。ここでトイレ休憩をして戸手の素戔嗚神社へ向かう。

相方城の文献資料は残っていないが、城門がこの神社に移築されている。外側の高麗門は四脚門で、内側の城門は櫓門、上部を櫓とし、下部を門としたもので、櫓には表裏に格子窓の下に丸い落狭門をあけた戦国時代の城門の様子を残している。

素戔嗚神社は「戸手の天王さん」と呼ばれ、夏に行われる「祇園祭」にはけんか神輿が出て賑わっている。この付近は江隈の里と呼ばれたところで、奈良時代には山陽道が通り、海陸交通の要地だったという。

この神社で一日の探訪を終えた。

足利直義について
―その生涯に関する私見―

木下　和司

歴史を学ぶことは、その時代を生きた人たちについての知見をふやしていくことでもあります。そんななかで自分の好みに合った生き方に出会えることも歴史を学ぶ楽しみの一つだと思っています。今回は、歴史を学ぶなかで、その生き方に共感をもった人物について少し書いてみたいと思います。

どうしても取り上げるべきは足利直義です。あまり有名な人物ではありませんが、南北朝期に興味をもっている人には、ファンが意外に多いのではと思っています。

最初に直義のことを知ったのは、佐藤進一さんの著作で、名著の呼び声が高い『南北朝の動乱』（中公文庫日本の歴史9）を読んだ時です。室町幕府草創期に兄・尊氏と幕府権力を二分した直義は、幕府の訴訟機関である引付を率い、鎌倉幕府以来の古い武士たちの支持を集めていました。これに対抗した勢力が尊氏を頭に担いだ高師直・佐々木道誉等の鎌倉幕府に筋目を持たない新興勢力の武士たちでした。

この二つの勢力の権力闘争が南北朝の動乱であり、古い勢力を基盤とした直義が敗れる運命にあったのは歴史の必然でした。直義はその謹直な性格から時代の社会秩序を壊すような新しい武士たちにはついて行けなかったのでしょう。

直義に関する文献は、非常にわずかです。前述の『南北朝の動乱』、同じく佐藤さんの論文である「室町幕府開創期の官体系」（石母田正・佐藤進一編『中世の法と国家』所収）にも、一部に直義の性格に触れた記述があります。

これらの著述の中で明確には書いていませんが、ぼくは佐藤さんも直義を好ましく思っているのではと考えています。佐藤さんの著作を読むとそのまじめで謹直な性格が伝わってきます。また、その仕事に対する情熱も伝わってきます。こんな共通点が直義と佐藤さんを繋いでいるのではと思っています。ちょっとこの稿の主題から外れてしまいますが、佐藤さんの歴史に対する情熱は、緻密で論理的な青く冷たい炎のように感じています。

もう一人、佐藤さんと同時代を生きた情熱の歴史家として、先ほどの『中世の法と国家』の共編者である石母田正さんがいます。

石母田さんと言えば、中世史の名作中の名作『中世的世界の形成』が思い出されます。石母田さんの歴史に対する情熱は熱い熱い赤い炎に例えられるのではと思います。今、ちょうど石母田さんの『平家物語』（岩波新書）を読んでいるのですが、ここにも石母田さんの歴史に対する熱い思いが伝わる言葉がちりばめられています。

ぼくは性格的には石母田さんの熱い情熱に近いのですが（石母田さんとぼくを比べるのはあまりに畏れ多いことですが）、ぼくの目指しているものは佐藤さん的な緻密で論理的な著述です。前述の「室町幕府開創期の官体系」がぼくを歴史研究に引き込んだ論文であり、座右の論文でもあります。いつかはこんな論文を書いてみたいと思っている理想です。ちょっと横道にそれすぎたので本論に戻します。

直義に関するまとまった著述を残している歴史家に、佐藤さんと同じく中世の法制史を専門としている羽下徳彦さんがいます。室町幕府初期の法制史に直義が大きな足跡を残しているためか、法制史の専門家に好まれる傾向があるようです。

羽下さんには「足利直義の立場」という三編の論文があります。第一編は軍勢催促状と感状の分析を通じて直義の軍事面での立場を明らかにしたものです。第二編は裁許状の分析を通して直義の政治思想を明らかにしたものです。第三編が直義について羽下さんの私論を述べたものです。この中で直義を

「謹直であり、身を持することにおいて自他に厳しく、設定した目標に対して妥協することなく行動する人間が出てきはしまいか。かような人間は恐らくもの静かではあろうが、舌鋒は鋭く、近づきにくい人間なのではなかろうか」

と述べています。この見解はぼくの直義に対する見解とほぼ同じものです。そしてもう一つ、直義の歴史に対する貢献として

「ある体制そのものを背負って生きた人間は、その体制の瓦解に際会するならば、その体制を担って死ぬことによってのみ、歴史の進展に寄与する結果になる」

と述べています。これは、ある人間の生き方もしくは生きる意味について非常に厳しい見解を提示しています。この見解に従えば、直義の生きた意味は、鎌倉時代的体制の瓦解を決定づけることにあったことになり、その生涯は非常に悲しいものに

なります。

しかし、ぼくは直義の生き方の中に自己の責務に忠実にひたむきに生きた一人の人間像を見ています。

これがぼくに直義という歴史上の人物に対して魅力を感じさせる理由です。直義ほどの教養があれば、歴史の流れの中での自分の立場を正しく認識していたはずです。それが自己の敗北に帰することも分かっていたと思います。それでも自己の背負っている責務から逃げず、ただひたむきにその責務を果たすべく生きた男として、直義という「侍」に限りない魅力を感じています。

ある人間の生涯を歴史の流れの中で眺めていると、直義と同じように自己の敗北を明確に意識しながら、自己の責任を誠実にまっとうして生きた人たちがいます。戦国期で言えば大谷吉継、明治期で言えば西郷隆盛、昭和期で言えば阿南惟幾などなど。何れも敗北の中に自分の生きる道をみつけた人々です。

ぼく自身は自分の人生に敗北を望んでいるわけではありませんが、不幸にして事に敗れざるをえない立場に立った時、直義と同じく自分の責務を誠実に果たせる人間でありたいと思っています。非常に難しいことではありますが。

御津町金川の里訪問記

小林さなえ

二月十八日曇、貸切バスは超満員。五九人の老若男女を乗せ、一路岡山県旭川の中流、金川の里へ出発。

山は臥龍山、城は玉松城（別名）といわれ、岡山県内でも屈指の規模の金川城へ十時より登り始めました。

今日は休息を十分取りながらゆっくりと本丸に迫っているようです。入山すると、薄緑の山繭がクヌギの葉に巻ついているのをたくさん見かけます。山繭は白繭をつくる養蚕より趣があり、しっとりと落ち着いた艶やかな絹糸が取れることは知っていましたが、繭を見つけるたびに古の織女になり、一反織ってみたいな……。世が中世なら着る立場にいないわ…。そんな想像をかき立てられるほど絹の魅力はあるものです。古来より米に匹敵するほどの価値のあるものと考えると、絹の眠っている宝の山かも。

城郭全体は四方に延びる尾根が使われている複合連郭式山城だそうです。本丸から二の丸・三の丸・林道寺丸、その他の出曲輪は単独で、一つ一つが広いと思いました。何より感動したのは、杉の木・天守・白水の名のつく大きくて深い三つの井戸です。白水の井戸はその名のとおり、色は白、山中にあって今なお水をたたえていました。山城は水が命、松田氏一族の生き残りを賭け全ての配置が決定されているようでした。

容易に入られない工夫がされている本丸入口の枡形虎口の詳しい説明を受け、城造りの一端に触れられて嬉しい限りです。

昼食は道林寺丸のヤブツバキの木の下でいただくことに決めました。この山で最初に春の訪れを思わせる紅色の花弁が何枚も重ね合わさったガクの先に二～三枚見つかり、まだ厳しい寒さが残る中、控えめな美しさが感じられ、心が弾みました。

生活の中にしっかり溶け込んでいる愛着のある椿は、【古事記】の雄略天皇の条に

「その花の照り坐す高光る日の御子」

と形容されています。艶やかな葉を目にしながら山を下る足も心から和らぎを感じ、自然の力に畏敬の念さえ抱くものです。そんなオーバーな、と思われる殿方は多いかも知れませんが、女性の感性は草花に向いているようです。

道林寺丸側から下山し、日蓮宗不受不施派の総本山妙覚寺を訪ねました。二月の歴民研の読書会は北条時宗でした。鎌倉時代に多くの宗教が生まれて庶民のものになっています。宗教も文化という意見に同感し、宗教の歴史に触れる機会を得たことも参考になりました。不受不施の厳しい宗旨を貫くため、禁制宗門となって二百年以上地下に潜行しながら法灯を伝え、明治十五年（一八八二）に再興されるほど熱心な信仰です。宗教とはどのような力があるものなのでしょうか。

御津町最後の訪問は、紙工の大庄屋河原邸でした。なだらかな南向きの斜面の上に藁葺きの母屋が懐かしい風景です。紙工の名の由来ためか、和紙の原料になる三椏がレモン色の小さな可憐な花を咲かせていました。

今日の終わりは、岡山空港近くの日応寺（日蓮宗）でしめくられました。奈良時代から続く三論宗が起源の古い寺です。毘沙門天・不動明王像（国重文）は力強くもあり、品位も感じ、美しくもありました。この寺の全ての建物に奈良の雰囲気を感じるのは三論宗のせいでしょうか。

まだ遠い春を探してふらふらとして後をついていった私ですが、一日の終わりに充実感を味あわせて頂き感謝申し上げます。

例会の資料もいっそう丁寧な内容で分かりやすく感服致しました。

土屋文明を斜め読む

平田　恵彦

三月初旬、群馬へ一泊二日の旅に出た。おおよそ六年ぶりである。かつては東京の友人と太田市（旧新田郡）を中心に、新田氏関係の史跡を訪ねたが、今回は前橋市・高崎市・群馬町・吉井町を中心とした古代史跡を探訪した。その際、群馬町保渡田にある県立土屋文明記念館に足を運ぶ機会があった。

土屋文明はアララギ派の歌人、有名な万葉学者で、文化勲章受章者でもある。平成二年、百歳で亡くなったが、死の直前まで創作意欲の衰えることがなかった短歌界の巨人である。保渡田は文明の生誕地だ。

二十年近く前、文明の『万葉集入門』を読んだことはあったが、その内容は全然記憶になく、歌も知らなかった。そこで旅立つ前に予備知識を得ることにした。しかし、処女歌集『ふゆくさ』などのオリジナルはすぐには手に入らないし、上梓した十四の歌集全部を読むことなどとうていできない。それで不本意ながら『日本詩人全集』（新潮社）、『現代日本文学大系』（筑摩書房）、『土屋文明百首』（短歌新聞社）等にざっと目を通しただけである。

僕は病的なほど詩的センスがない。その僕が歌の批評などおこがましいのだが、あえていうと、文明の歌は率直、あるいは剛直の言葉が似合うように思う。それは恐らく万葉調（五七調）といわれる歌調が基本にあるからだろう（アララギ派の伝統的歌風にもなっている）。「七五調で読みやすく」をモットーにしている僕にはずいぶん違和感があって、声を出して読むとつっかえることも多かった。でもしばらくすると、それがかえって魅力になってくるから不思議である。以下ランダムに文明の歌をあげてみる。

▼毛の国はいつもかわける冬の原あからさまにも吾が村のみゆ

（第二歌集『往還集』より）

「毛の国」は現在の群馬県・栃木県にまたがる地域の古名で、律令制下、上毛野と下毛野に分かれる。八世紀には、好字二字をとって群馬県域を上野（かみつけぬ→かみつけ→こうずけ）と表記するようになる。空っ風と雷が名物のいわゆる上州だ。かかあ天下もよく知られているが、いまでは全国に蔓延しているので名物ではなくなったかも。ちなみに、群馬には雷電神社が数多くあり、邑楽郡板倉町に式内総本社がある。瀬戸内に龍王社が多いのと対照的だ。

それはさておき、この歌は故郷保渡田周辺を詠ったものだが、文明の見た広漠たる光景の一角に大古墳群が映っていたはずだ。保渡田古墳群は群馬県でも有数の古墳群で、保渡田薬師塚・保渡田八幡塚・井出二子山の三古墳はいずれも一〇〇m級の前方後円墳である。この三古墳の被葬者は、有名な三ツ寺I遺跡（日本最大級の古墳時代の豪族居館）の主であるのは確実らしい。

▼立ちかへり立ちかへりつつ恋ふれど見はてぬ大和大和しこほし

▼山も川もうつるといへど千年を結ぶ言葉をぞ思ふ

▼上村君老いていよいよ頑固なれど君ありて我が見得し大和ぞ

『続青南集』所載の「大和恋」と題する五連作のうちの第一首・第三首・第五首。

最初の歌は代表作としてよくあげられる。この歌は明らかにヤマトタケルの有名な国偲びの歌

「倭は　国のまほろば　たたなづく
青垣　山隠れる　倭しうるはし」

を意識している。調べは確かに美しい。けれどもリフレインを二度使っているので少しくどい気もする。僕は最後の歌が一番好きだ。「上村君」というのは正田村（現奈良市正田町）在住の上村孫作氏のことで、文明の大和万葉踏査の協力者だった人。人柄が目に浮かぶような歌である。二番目は万葉学者の心情がにじみ出ており僕も同感。晩年には次のようにも詠んでいる。

▼大伴旅人山上憶良にはま見えねどその歌よめば会へるも同じ

（『青南後集以後』所載、九七歳作）

御陵や古墳をモチーフとした歌もけっこうある。

▼菅原のみささぎ暮れて道白き佐紀野をぞ行く命なりけり

（『山下水』「大和正田村」より）

菅原は現在の奈良市菅原町周辺で、菅原氏の本貫地。菅原氏の本姓は土師氏で、古墳造営に携わった氏族である。この歌の陵は尼辻西町にある垂仁天皇陵（宝来山古墳）だと思う。土師氏はこの古墳をはじめとする佐紀盾列古墳群の造営にあたった。

『続青南集』には次の二首がある。

▼遠き世の墓穴のあと棄を積みありにしところ如何にかなりし

（「やまとの国　葛城鴨山」より）

▼長屋王吉備内親王の墓の木々わづかに見えて独り過ぎゆく

（「平群谷」より）

掉尾は最晩年、九九歳の作（『青南後集以後』所載）。壮烈！

▼命すぎ何をつくろはむこともなし皮をはぎ肉をすて骨をくだけよ

『室町戦国遺文―備後編』編纂の史料求む

小林　浩二

私が『室町戦国遺文―備後国編』の編纂を思い付いたのは二年程前だったが、その時は史料の多さと、本により文書の形態が異なることに困惑した。全ての文書をワープロに打ち込むことは、気の遠くなるような作業だったので、スキャナーでパソコンに取り込んで、文字変換することを思い付いた。これは我ながら名案だと思ったが、旧漢字は殆ど正しく変換されないなど、思い通りには進まず、作業は暗礁に乗り上げた。

そこで方針を切り替え『南北朝遺文―備後国編』を編集することにした。これは松岡久人先生が編纂された『南北朝遺文―中国四国編』六巻の中から備後に関する四三七項目を選出しコピーして編年資料にしたが、それでも完成まで六ヶ月を要した。

次に手掛けたのは『鎌倉遺文―備後国編』で、竹内理三先生編纂の『鎌倉遺文』四十二巻と『鎌倉遺文補遺編』五巻から備後に関する項目を選出する作業に六ヶ月、製本に二ヶ月かかって、やっと出来上がった。

これに自信を得て『室町戦国遺文―備後国編』に再挑戦したのは、去年の梅雨明けの頃だった。本書には南北朝が統一された明徳三年（一三九二）から、関ヶ原の戦があった慶長五年（一六〇〇）までを収載することにした。前回の失敗に懲りて、今度は文書をスキャナーでパソコンに取り込み、画像処理で二段組に統一して編集することにした。この方法では一時間に三、四編しか処理出来ないが、どんな文字や花押・記号等でも再現出来る利点がある。

こうして左記に載せる文書から、備後に関する約二四五〇項目を収録したが、まだ私の知らない文書や、出版されてない文書も多数あると思われるので、見識のある方から御教示をいただき、備後の中世史料三部作を完成したいと願っているので、ご協力をお願いする次第です。

＊

【収録文書】

『大日本古文書』所載

毛利家文書・山内首藤家文書
吉川家文書・小早川家文書
平賀家文書・三浦家文書

＊

『萩藩閥閲録』第一巻～第四巻

『広島県史』古代中世資料編Ⅰ所載

満済准后日記・桃華藻葉・応仁記
政所賦銘引付・綱光公記・薩戒記
成宗大王実録・碧山日録・建内記
御湯殿上日記・親長卿記
證如上人日記・大乗院寺社雑事記
九州御動座記・楠長諳下向記
薩藩旧記雑録・糸崎神社文書
宇野主水日記・蔭涼軒日録
後法興院記・田中教忠氏舊藏文書
允澎入唐記・豐臣秀吉九州下向記
海東諸国記・在盛卿記・親元日記
山科家礼記・鹿苑日録・拾芥記下
大内義隆記・公卿補任・三藐院記
千手寺文書・続史愚抄・江氏家譜
戊子入明記・祇園社記・横山文書
大館常興日記紙背文書

＊

『広島県史』古代中世資料編Ⅳ所載

上村八幡神社文書・須佐神社文書
飯田米秋所藏文書・糸崎神社文書
三原城城壁文書・御調八幡宮文書
善勝寺文書・因島村上文書
廣寂寺文書・木下文郎氏所藏文書
米山寺文書・松本快藏氏舊藏文書
法常寺文書・武田金三氏所藏文書
潮音寺文書・幸谷達順氏舊藏文書
浄土寺文書・『知新集』所収文書
西國寺文書・児玉文書・大友文書
安國寺文書・三宅文書・加藤文書
光照寺文書・堀江文書・井西文書
常国寺文書・石井文書・八谷文書
法道寺文書・古志文書・桑田文書
寶藏寺文書・澁谷文書・横山文書
千手寺文書・中戸文書・三吉文書
東大寺文書・三吉鼓文書・鼓文書
尾多賀文書・西國寺文書・岸文書

＊

『広島県史』古代中世資料編Ⅴ所載

『藝備郡中土筋物書出』所収文書
京都大學文學部所藏文書・桂文書
『福山志料』所収文書・士林證文
『知新集』所収文書・極樂寺文書
岩國徴古館所藏文書・祇園社文書
白河本東寺百合文書・鹿王院文書
保坂潤治氏舊藏文書・高野山文書
熊野那智大社文書・東寺百合文書
石清水八幡宮文書・八阪神社文書
御判物古證文寫・防長風土注進案
贈村山家返章・贈村山家證文
天野毛利文書・長府毛利文書
蜷川家古文書・嚴島野坂文書
新出嚴島文書・眞繼文書・森文書
大願寺文書・建内文書・日下文書
黄薇古簡集・村山證文・細川文書
井原文書・野坂文書・諸臣證文
有福文書・田坂文書・飯田文書
田総文書・譜録等

＊以上の文献以外にご存じの文献があれば、小林浩二さん（〒八四九―四一―六八四二）にご連絡ください。

（事務局記）

新入会員紹介

新しく次の方々が入会されました。

転居のお知らせ

新入会員紹介

二月十日(土) 午後二時「『古事記』を読む」。参加十八名。

二月十七日(土) 午後七時「『備後古城記』を読む」。参加十三名。

二月十八日(日) バス例会「臥龍山に松田氏の盛衰の跡を見る」講師出内博都さん・小林浩二さん。参加五九名。

二月二四日(土)

▼午後二時。第二回郷土史講座「ジャワ島とバリ島の神々を訪ねて」講師三好勝芳さん。参加二八名。

▼午後七時。この日から新シリーズ古墳講座Ⅷ。参加十三名。

三月七日(水) 役員会、参加十八名。

三月十日(土) 午後二時「『古事記』を読む」。ついに上巻終了。足かけ七年。ここで一休みします。中巻再開をお楽しみに。参加二三名。

三月十七日(土) 午後七時「『備後古城記』を読む」。参加十四名。於福山市民会館会議室。

三月十八日(日) バス例会「総領町の史跡を訪ねる」講師田口義之会長。参加五五名。

三月二四日(土) 午後七時。古墳講座Ⅷ。参加十四名。於ふくやま市民交流館。

三月二五日(日) 青春きっぷの旅「法隆寺と藤ノ木古墳を訪ねる」講師平田恵彦さん。参加五〇名。

三月三一日(土) 午後二時。第三回郷土史講座「長和庄について」講師小林定市さん。参加三四名。

一泊旅行申込金納入のお願い

五月一九日、二十日実施の一泊旅行申込予約の方は申込金一万円をご納入ください。

申込金は同封の郵便為替用紙を御利用いただき、四月三一日までにお振り込みください。

この申込金納入をもって正式の申し込みとなります。

『備後古城記』を読む

【実施要項】

〈座長〉小林浩二さん(部会長代行)

〈開催日〉四月二一日(土)

〈発表課題〉青ヶ城跡・銀山城跡

〈開催日〉五月十二日(土)

＊五月は第二土曜日に変更です。

〈発表課題〉串山城跡・川上城跡等

〈時間〉午後七時～午後九時

〈会場〉福山市中央公民館

〈会費〉資料代として一〇〇円程度

＊いずれも福山市内の城跡です。多数のご参加をお待ちしています。

古墳講座Ⅷ

【実施要項】

〈座長〉山口哲晶さん(部会長)

〈開催日〉四月二八日(土)
五月二六日(土)

〈時間〉午後七時～午後九時

〈会場〉ふくやま市民交流館

歴史小説読書会

【実施要項】

〈座長〉種本実さん(部会長)

〈開催日〉六月二日(土)

〈時間〉午後二時～午後四時

〈会場〉ふくやま市民交流館

〈六月の課題図書〉

「秀吉と武吉」城山三郎 著
新潮文庫　定価五九〇円

新世紀初の一泊旅行
津和野・益田を味わう旅

今回の一泊旅行は素晴らしい史跡が目白押しです。ぜひご参加下さい。

【実施要項】

《実施日》五月十九・二十日（土日）
＊雨天でも決行します。

《集合時刻》午前七時三〇分
＊時間厳守・集まり次第出発。

《集合場所》福山駅北口観光バス停
＊福山キャッスルホテル前

《参加費》会員　二三〇〇〇円
一般　二四〇〇〇円
拝観料＝萬福寺（二五〇円）・医光寺（二五〇円）・永明寺（三〇〇円）／入館料＝雪舟の郷記念館（一〇〇円）・森鴎外記念館（四〇〇円）・西周旧宅（三五〇円）／津和野城登山リフト代（四〇〇）・初日と二日目の昼食弁当代・宿泊費・宴会費・傷害保険料・資料代を含みます。

《講師》旅行委員三人が担当
種本実さん（歴民研部会長）
坂本敏夫さん（城郭部会評議員）
塩出基久さん（事務局役員）

《宿舎》【青野山荘（かのあしぐん）】〒六九九―五六〇四
島根県鹿足郡津和野町大字森村イ―二八七
TEL〇八五六―二―〇四三六

《募集人数》あと約十名

《参加申し込み》
事務局に電話でお願いします。

《受付期間と受付時間》
現在受付中。
午後（夜）八時～午後（夜）九時。

《申込金の振り込み》
受付後、郵便振替用紙を送付しますので申込金一万円をお振り込みください。申込金納入で正式な申し込みになります。

《キャンセル》
キャンセルはなるべく早くお申し出ください。申込金については
①四月三十日までは全額返金
②五月十三日までは半額返金
③五月十四日以降は返金しません。

《その他》歩きやすい服装・靴でご参加ください。初日の朝食はすませてご参加下さい。

《帰着予定時刻》午後七時ころです。

【初日の主な探訪予定地＝津和野】

①津和野城跡（国史跡）…弘安五年（一二八二）吉見頼行の築城と伝える。当初土塁だけの山城だったが、慶長六年（一六〇一）坂崎出羽守が入城後、全域を石垣で強化、本格的な城造りを実施。坂崎氏の転封後は亀井氏が入城、十一代城主をつとめ明治を迎えた。

②森鴎外旧宅（国指定文化財）と森鴎外記念館…森鴎外旧宅の南に記念館が平成七年（一九九六）に完成、鴎外の生活や作品を展示。

③西周（あまね）旧宅（国指定文化財）…西周は文明開化政策で啓蒙的な約割を果たした人。東京学士院会長、東京高等師範学校初代校長を務めた。

④殿町界隈散策…約一kmの間に「多胡家（亀井十一代の家老）楼門」「藩校養老館」「錦鯉の見られる川」「旧郡庁舎址」「郷土館」等が点在。

⑤覚皇山永明寺…曹洞宗。応永二七年（一四二〇）に津和野城主吉見頼弘が創建。開山は道元の法孫月因和尚。吉見・坂崎・亀井の歴代津和野城主の菩提寺として栄えた。県指定文化財、羅漢像・道元禅師真筆・兆殿司の涅槃（ねはん）像等があり、庭園も見事。

【二日目の主な探訪予定地＝益田】

①三宅御土居跡（県史跡）…泉光寺境内には関ヶ原の戦い以前、石見国で最大の勢力を誇った益田氏の館があった。最近の発掘調査の結果、その築造は平安時代末期までさかのぼることが判明した。

②七尾城跡（県史跡）…益田氏の戦時の備えとして築かれたとされる。平時は地域支配の拠点として三宅御土居を築いて居住していた。中世の山城は戦時の備えとされてきたが、この城は戦国末期に益田氏が居住していたことが発掘調査の結果判明、城郭研究の通説を覆した珍しい山城。遺構もよく残る。

③柿本神社…歌聖、柿本人麻呂を祭神とする神社。全国に点在する「柿本神社」の総本社である。柿本人麻呂は石見国の国司として赴任し、この地で逝去した。

④萬福寺…創建年代は不詳。当初は安福寺と称していたが、応安七年（一三七四）に益田兼見が現在地に移して萬福寺と改称、香華院とした。本堂・二河白道の図が国重要文化財。雪舟作の庭園が国史跡・名勝に指定。

⑤医光寺…臨済宗東福寺派。貞治二年（一三六三）の創建と伝えられる。崇観寺と称していたが衰退、医光寺と合併現在にいたる。本尊は薬師如来像。総門は七尾城の大手門を関ヶ原の合戦後、移築したもの。当寺の庭園も雪舟が作庭。

⑥雪舟の郷記念館…説明不要。

⑦小丸山古墳…益田市を一望する丘の上に立地している古墳時代後期の前方後円墳。墳丘の全長五二m。昭和六二年（一九八七）に上半部が壊されたが、市はこの遺跡を保存するため九年前に復元した。

＊天候その他の都合でコースを変更・省略する場合があります。

第五回郷土史講座
斉明天皇の狂心と当時の諸情勢

私は昨年二月、備後の常城・茨城の築城をめぐって郷土史講座を担当した。今回はその続編である。

この時代、斉明天皇と中大兄皇子が政治を左右していた。天皇はわずか六年の間に小墾田宮・川原宮・後飛鳥岡本宮・吉野宮・両槻宮・九州朝倉宮等に遷都。また、三ヶ所の須弥山、多武峯の垣や天香山から石上山までの溝の造営等、多くの土木工事を起こし、人々から恨みを受け「狂心」とまで言われた。『日本書紀』の中で天皇がこれほど悪く書かれているのは異例である。

それはいったい何故であろうか。この謎を天皇家と蘇我氏や藤原氏の関係、諸外国との国際的な緊張関係、および大化改新以後の律令制国家体制造りと国威発揚の必要性等から総合的に分析、解明したい。（寺崎記）

【実施要項】

《講　師》寺崎久徳さん（事務局長）
《開催日》五月二六日（土）
《時　間》午後二時～午後四時
《会　場》福山市中央公民館
《参加費》一〇〇円程度（資料代）

六月バス例会
作州の名刹本山寺を訪ねる
―水無月の杜に幽玄の伽藍佇む―

今回の例会は、あの名刹本山寺を中心に探訪します。歩いての移動はほとんどありません。どなたでも参加できます。ぜひご参加下さい。

《主な探訪予定地とその概要》

▼**妙本寺**…賀陽町北にある日蓮宗の寺院。山号は具足山。弘安四年（一二八一）の創建と伝えられる。開基は日像上人、第二祖は大覚大僧正（妙実）で、大覚はこの寺を拠点として備前・備後に日蓮宗を布教した。法華経を守護する三十番神を祀る番神堂（鎮守堂）は桃山時代の建築で、国重文。本堂は室町時代の建築、宝形造茅葺で、県重文に指定されている。

▼**吉川八幡神社**…賀陽町吉川にある旧県社。社伝によると、永長元年（一〇九六）の創祀。平安時代末期この地は石清水八幡宮の庄園だった。その関連で勧請されたと考えられている。本殿は入母屋造檜皮葺の室町時代の建築で、国指定重要文化財である。

▼**総社宮**…加茂川町加茂市場にある旧加茂郷の総社。主祭神は大己貴命。境内にある八角石灯籠、石造地蔵菩薩立像はいずれも県重文。また、社叢は県指定の保護林となっている。

▼**円城寺**…加茂川町円城にある天台宗の寺院。山号は本宮山。寺伝によると、霊亀元年（七一二）の創建。境内にある宝篋印塔は延文二年（一三五七）の銘をもち県重文。

▼**志呂神社**…建部町下神目にある旧県社。志呂大明神・志呂宮ともいう。主祭神は事代主神。祭の京尾御供（神饌）は県無形民俗文化財に指定されている。本殿は江戸末期、拝殿は明治の改築。

▼**本山寺**…柵原町定宗にある天台宗の寺院。山号は岩間山。寺伝によると、役行者の修業地で、大宝元年（七〇一）、頼観（佐伯有頼）の建立という。天永元年（一一一〇）現在地へ移転、以来隆盛を極めてきた。岡山県を代表する寺院で、まさに文化財の宝庫である。

▽**本山寺本堂**…重要文化財。岡山県最古の本堂建築。寄棟造檜皮葺、南北朝時代の建築。

▽**本山寺三重塔**…重要文化財。岡山県最大の三重塔。方三間檜皮葺、青銅製相輪、欅の総円柱。江戸時代初期建築の優作。

▽**本山寺宝篋印塔**…重要文化財。「建武二年（一三三五）六月十一日」「大願主覚清」の銘がある。

▽**本山寺舎利塔**…重要美術品。「康永三年（一三四四）六月十三日」「願主覚清、仏阿」銘がある石塔。

＊他に県重要文化財として、常行堂・仁王門・御霊屋（将軍霊廟）・長屋・応永六年（一三九九）銘宝篋印塔・木造鬼面・絹本著色両界曼荼羅図などがある。

【実施要項】

《講師》平田恵彦さん（歴民研副部会長）
《実施日》六月三日（日・雨天決行）
《集合時刻》午前八時一〇分（厳守・集まり次第出発）
《帰着予定時刻》午後六時ころ
《集合場所》福山駅北口観光バス停（福山キャッスルホテル前）
《参加費》会員　三七〇〇円
一般　四二〇〇円（傷害保険料・資料代含む）
《募集人数》四八名（申込先着順）
＊五九名までは補助席で受付。それ以上の場合はキャンセル待ちです。
《申し込み》事務局に電話で
《受付開始日》四月二三日（月）～
《受付時間》午後八時～午後九時
《その他》弁当・飲物は各自持参。また、歩きやすい服装・靴でご参加下さい。

第十九回 親と子の古墳めぐり

主催　備陽史探訪の会
後援　福山市教育委員会

【実施要項】

《実施日》五月五日
（祝日・小雨決行・雨天中止）
《集合時間》午前八時三〇分
《集合場所》
ＪＲ福山駅南口「釣人の像」前
＊現地集合の方は津之郷小学校に午前九時集合
《参加費》大人六〇〇円
子供三〇〇円
＊保険料・資料代を含みます。
＊交通費は各自の負担です。
《参加資格》原則的には親子での参加ですが、一人でもグループでもかまいません。ただし、低学年の子供には付き添いを必要とします。また、大人だけの参加も可能です。
《申し込み方法》住所・氏名・年齢・電話番号を明記の上、事務局まで往復はがきで申し込んでください。
（注）申し込みは定員（一五〇名）をこえた時点で締め切ります。

見学する古墳（津之郷・赤坂コース）
本谷遺跡→本谷古墳群（一号古墳・古墳出土の須恵器見学）→坂部古墳群→すべり石第一号古墳→神原病院裏古墳群→イコーカ山古墳
＊福山市津之郷町から赤坂町にかけての古墳を見学します。このコースは古代海上交通の要衝であったと思われるこの地域の古代を考える上で重要な古墳です。
▼**その他**　約四kmの行程を歩きますので、歩きやすい服装と靴を着用してください。また、弁当・飲み物は各自持参してください。

《主な探訪予定地とその概要》
▼**本谷遺跡**…津之郷小学校の北西一帯の弥生時代中期の遺跡。中国「新」王朝の時代の貨幣「貨泉」を出土している。
▼**坂部古墳群**…本谷の丘陵部に築かれた七基の古墳群。六基は横穴式石室と確認され、ほとんど円墳と考えられている。四号墳の石室は巨大。全長八m、幅一・七九m、高さ一・七五mで、市史跡に指定。
▼**すべり石第一号古墳**…備後赤坂駅北西の丘陵上にある。片袖式の横穴式石室の玄室の長さは五・五m、羨道の長さ四m、幅二mである。
▼**イコーカ山古墳**…備後赤坂駅の東に所在。直径約一五m、高さ約三mの円墳で円筒埴輪が出土している。墳丘は市史跡として整備されているが、内部主体部は未調査。

第四回郷土史講座 古墳時代の夜明け
～弥生時代から古墳時代へ～

四月の古墳講座は、親と子古墳めぐりに先立って古墳部会長の山口さんにお話しいただきます。

《講師》山口哲晶さん（古墳部会長）
《開催日》四月二八日（土）
《時間》午後二時～午後四時
《会場》福山市中央公民館
《参加費》一〇〇円程度（資料代）

二一世紀という新世紀を迎えた今年、一つの区切りという意味で古墳について私なりにまとめてみたいテーマがいくつかあります。その一つが今回お話ししようと思っているものです。名付けて『古墳時代の夜明け』。弥生時代の終末から古墳時代の前期までの流れを復習の意味を込めてまとめてみたいと思います。

従来古墳時代の始まりは四世紀からと言われていたものが現在では三世紀半ばまで押し上げられようとしています。また、近年弥生墳丘墓なのか古墳なのか性格がはっきりしない事例のお墓の報道が紙上を賑わせています。この辺りから話を進めていき、前期古墳の様相にせまりたいと思っております。（山口記）

会報一〇一号の原稿募集
原稿締切　五月七日(月)必着

時間の都合で掲載できない場合があります。早めにお送りください。

本文「一行一六字×一二〇行」でちょうど一ページです。以下三一行毎に一ページの一段になります。

四〇〇字詰原稿用紙を使用する場合は、下四字分を空白にして、一行一六字にして書いて下さい。皆様の力作を期待しております。皆様の会報です。身近な話題でもＯＫ。どしどしお寄せ下さい。

【編集後記】

▼『備陽史探訪』一〇〇号、いかがでしたか。自画自賛かも知れませんが、オールスターそれぞれの個性がよく出た記念号になったのではないかと思っています。
▼突然ですが、磐座亭はしばらくお休みをいただくことになりました。しかし、会報の紙面は会員の皆様自身の手でできあがるものです。新たな出発となる一〇一号からもいままで同様変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。（磐座亭主人）

備陽史探訪の会事務局 〒720-0004
福山市多治米町五―一九―八
☎〇八四九(五三)六一五七